

せい か ほう まさ
星 火 方 正

ほうまさ
～燎原の火は方正から～

野ざらしの骨

「大東亜聖戦大碑」と護国神社

天を恨み、地を呪いました 松田ちゑさんの半生

木村直美さんのご逝去を悼む

周恩来と国際主義的精神

岩崎 スミ

寺沢 秀文

奥村 正雄

牧野 史敬

大類 善啓



童心に返って 徐士蘭さん（右）と三女・叢会霞さん

2011 年 6 月 伊豆市 修善寺 虹の郷で（記録映画「10 日間だけの祖国」より）

なぜ方正（ほうまさ）なのか？

方正と書けば日本人なら「ほうせい」と呼ぶのが普通だろう。しかし黒龍江省には宝清という県があり、旧満洲にいた日本人たちは、「ほうせい」と呼ぶ場合は宝清を指した。その宝清と区別するために、方正を音訓混じりで敢えて、「ほうまさ」と呼び、今でもそう読んでいる。戦後も彼の地で過ごした人々にとって方正はあくまでも「ほうまさ」なのである。私たちも彼らの思いを受けて、会の名称を「方正友好交流の会」とした。

なぜ『星火方正』（せいかほうまさ）なのか？

星火とは、とても小さな火のことである。私たちの活動も今は小さな野火にすぎないが、やがて「燎原の火のように方正から平和と人類愛的な友愛の精神が広まるのだ」という意味を込めて会報の名前にした。

星火方正（第 20 号） ～燎原の火は方正から～

目 次

麻山よ再び—岩崎スミ手記「野ざらしの骨」—	高橋 健男	1
野ざらしの骨	岩崎 スミ	2
ソ連兵に奪い去られた妹の親友	酒井 旭	7
.....		
「大東亜聖戦大碑」と護国神社	寺沢 秀文	9
天を恨み、地を呪いました 松田ちゑさんの半生	奥村 正雄	13
周恩来と国際主義的精神	大類 善啓	23
.....		
木村直美さんのご逝去を悼む	牧野 史敬	31
木村さん関連の写真及び記事	編集部	33
.....		
「満蒙開拓つれづれ草」NO.157 ～川田龍平さんが国会で方正公墓について質問～	寺沢 秀文	35
.....		
再び山口淑子について	大類 善啓	40
燎原の火は方正から メルマガ「オルタ通信」より	〃	47

試写会のご案内 記録映画『10 日間だけの祖国』	奥村 正雄	55
神奈川県秦野市で『嗚呼 満蒙開拓団』上映さる	編集部	59
旅のご案内 <じっくり上海歴史散歩 6 日間>	方正友好交流の会	61
映画『山本慈昭 望郷の鐘 ——満蒙開拓団の落日』を見て 「日本と中国」より転載	大類 善啓	62
番外編 文化の発祥地は国境を越える！ タンゴ 起源はさまよう望郷の魂 東京新聞より転載	〃	63
——「方正友好交流の会」へのお誘い——	編集部	64
報告・編集後記		65

麻山よ再び 一岩崎スミ手記「野ざらしの骨」一

高 橋 健 男

岩崎スミさんは1924（大正13）年12月生まれの90歳である。本誌『星火方正』への筆者寄稿文（11・12号の拙文、12・13号の小出公司さん寄稿）が縁で、2013年・2014年と2回、北海道は夕張郡由仁町の自宅を訪問、^{ハタホ}哈達河開拓団や^{まさん}麻山事件に関する話を聞かせてもらったり資料を拝見させてもらったりした。ご一緒した時間は延べ12時間くらいになろうか。

岩崎スミさんは元哈達河開拓団の在満国民学校の若き教師であった。低学年児童の担任をしていたが、ソ連軍が満洲に侵攻を開始した8月9日には夏期講習の出張で^{とうあん}東安の町において、開拓団とは別の避難行動となった。麻山での自決事件には遭遇していないが、幼い教え子たちが犠牲になった。

開拓団史『麻山の夕日に心あらば』（1970）掲載手記をはじめ各種ジャーナリズムでのインタビュー記事で、会員諸氏にはご存知の方も多いであろう。NHKドキュメンタリー『再会—35年目の大陸行—』（1980年11月2日放送）は、かつての教え子である残留孤児たちとの再会を報じ、唱歌をいっしょに歌う姿は広く感動を得た。その時の訪中団長であった長野県下伊那郡阿智村^{あち}長岳寺の住職・山本慈昭^{じしょう}翁（「日中友好手をつなぐ会」会長）が、詳細を『再会—中国残留孤児の歲月—』（1981）にNHKディレクター・原安治とともに書いている。

長岳寺境内にはNHK放送を期に、「満洲開拓哈達河水子地蔵」やその解説板が建立された。「満蒙開拓平和記念館」訪問時にはぜひ長岳寺にまで足を延ばし、山本慈昭翁胸像、本年1月から全国公開の映画「望郷の鐘」の鐘楼や「日中友好不戦の碑」などをご覧いただきたい。

岩崎スミさんの了解のもとでここに紹介する「野ざらしの骨」は、2000（平成12）年、広尾町文化協会から依頼されて同町の町民文芸誌『浚渫』に寄稿したものである。『浚渫』第29号の42～53ページに掲載された。

1949（昭和24）年、ある遺族が麻山事件の実情調査を求めて参議院在外同胞引揚委員会に提訴した。「その時の証言にもまだまだ語られていない真実があるのよ…」「中村雪子さんの『麻山事件』の後にも、帰国した人が語った真実があるのよ…」「事実を少しオブラートに包んで伝えているのがいくつもあるのよ…」などと、「麻山」を語る岩崎スミさんの話の中にはここに書かれていることが何回も何回も出てくる。高齢だから繰り返しが多くなるのではない。記憶が鮮烈で強烈であるからこそ、何回話しても同じ話となるのである。筆者がそう感じて聞き取った内容を、会員諸氏にご本人の文章で紹介したい。

なお、岩崎スミさんは『浚渫』第29号の発行後、寄稿手記に再度推敲を加えている。以下の手記中の小見出しは、『浚渫』第29号の文章に朱書きで追加されていた。その他多少の修正や文章表現の練り上げもある。従ってここに紹介するのは、『浚渫』第29号掲載文の修正版である。なお、句読点の配置やルビ、旧言い回しの改変や常用漢字の使用等、筆者が少し手を加えたことをお断りしておきたい。修正・変更部分は岩崎スミさんの確認を経ている。

「なぜ子供たちは死ななければならなかったのか…」、いやもっと直截に言おう。「大人はなぜ子供たちを殺したのか…」が、誰も答えてくれない岩崎スミさんの問いである。本手記末尾にあるように、岩崎スミさんは子供たちの「代弁」のために「野ざらしの骨」を書いた。更には、「代弁」と題する未発表手記がある。

以下、岩崎スミさんの手記を紹介する。

野ざらしの骨

岩 崎 ス ミ

夢で逢いに来た人

「先生、助けてえー」——広い大陸の丘を逃げまどう悲鳴に驚き、ガバッと布団をはねのけて坐る。汗びっしょり。あ、今のは研ちゃんとはじめ君だった。涙が止まらない。胸は苦しく、夢であったかと、動悸をおさえる。

カラン、コロンと下駄を鳴らしながら、故郷の由仁駅に疲れ果てて降り立つ母の姿。「貴女に逢うまではと思ってこうして帰って来た」——戦地で亡くなった人が明け方の夢にカラーで出て来られる。きっと浮かばれないのだ。巡礼の旅に出よう。白装束をまとい、私は一人旅に出た。

香川県、善通寺で真言宗本山のかいだん巡りという真っ暗いところで、心静かに一人で読経をすませると、誰もいないはずなのに一人の僧が行者かと思われる人が穏やかに声をかけてきた。

「貴女がなぜ毎日毎日この寒中歩いて巡拝をなさっているか、私にはすべてわかります。貴女の肩にも背にも、大勢の血まみれの子らが乗っています。貴女のその細い体でどんなにか重いことでしょう。この寺で預かってあげますから、身を軽くしてお行きなさい。貴女のご先祖の菩薩級のお方が常に守ってくださっています。」

真っ暗い中で蠟燭一本の光に近寄り、二人は向き合った。どうして私のことを言い当てられるのか？

「死者は皆、貴女の心を非常に喜んでおられます。」——その人の語る、生徒、村人、母の最期の話を私は滂沱と涙しながら一言漏らさず聞いた。

翌早朝出発しようとする、私の白い地下足袋を高僧が両手で火にかざして乾かして下さり、涙をにじませて合掌していつまでも見送って下さり、私は親に逢えたような気がした。それ以来、あんなに夢で逢いに来た人も、稀にしか来なくなった。

自 決

1945 年 8 月 9 日、日ソ開戦時、私は国境の町東安市にいて、開戦と同時に鉄橋が爆破されて家に帰れなく、そのまま女学生をハルピンまで安全に連れていくよう命じられた。あの時のソ連の機銃掃射はとても執拗で、非戦闘員ばかりを野の果てまでもと追いまくり、撃ちまくり、私と抱き合っていた女教師も撃たれた。

「戦争なんかで死にたくない」——常に心に強く思っ、歯を食いしばって逃げ回った。

哈達河開拓団の人たちも同じ運命にさらされた。恐ろしい道を急ぎに急いで、夜も昼も、炎暑も大雨も、深い泥濘の道も、後方から敵の戦車の迫るの報に命からがらたどり着いたのが麻山であった。時すでにソ連軍は別の道から麻山に出て来て、8 月 12 日関東軍と遭遇戦をしていて、私と村人の前方に進んでいた人たちは戦闘にまき込まれて戦死し、12 歳の少年までが割腹自殺をし、20 余名の女性はソ連兵に連行された。

後日、奉天で聞いた話によると、「連行された最後の一人の女性を 30 人もの兵士が強姦し、そのため出血多量で死んだ」という。それゆえ日本人女性はほとんど坊主頭となり、男装し、身の純潔を守ろうとした。戦とは、弾にあたって死ぬよりも恐ろしいことが当然のごとく行われる。野獣と化した兵がおそいかかってくる。脱兎のごとく身を翻すことができねば、餌食にされる。

北海道大学出身の貝沼洋二団長は、お若いのに全国から集合していた猛者から最尊敬され、とても慕われる人格者だった。動員令で次々と出征し、わずかしきない男性にまで避難途上で召集がある。「団長さん、家族をたのみます」と別れて行き、出征家族を何としても安全地帯まで連れて行

かねばならない。団長は敗走してくる関東軍に一生懸命婦女子たちの護衛を頼んだが、「牡丹江^{ぼたんこう}へ転進を命ぜられているから駄目だ！」と、山の方へ行ってしまった。次の部隊にも断られ、700 余名の婦女子のみを引き連れ、この先たどる道は餓死、凌辱^{りょうじよく}、暴行。この疲労困憊^{こんぱい}しきった乳呑み児、母親、学童、老人。皆の目は赤く血走り、持って逃げた食糧^{しりょう}は篠突く雨にふやけ、餌^{えさ}も食わずに進んだ馬は動かず、万策尽き、死を選んだのだと思う。団長は真っ先に「自分は死をもって婦女子の道案内をする」と、日本刀で割腹自殺をなさった。それを合図のように、男子の銃によって短時間に家族ごとに円^{まる}くなって黄泉^{よみ}に旅立ってしまったと聞いている。

そこでの自決者数は 465 名である。あの当時、沖縄は玉砕、サイパンも玉砕だった。「生きて虜囚^{りょしゅう}の辱^{はづかし}めを受けじ」「命^{いのち}を鴻毛^{こうもう}の軽きに…、尽忠報国、一億一心」で、戦争に反対したら警察に連れていかれた。麻山では、母は子らを自分の腹の下に入れ、あるいは抱きしめて、撃たれて死んでいった。

長い間独ソ戦でむごい戦場をあまた見てきたソ連兵でさえ、眼をそむけずにはいられない惨状であったという。その自決現場を皆が死んだ翌日の朝、8 月 13 日、今広尾町にご健在である里瀬勝様が関東軍の兵士、西東安教育隊^{とうあん}として通り、かわいそうな婦女子の姿を見て、未だに鮮明に目に浮かぶと『淞漠』にも記されている。里瀬様は『第三国境守備隊小史』188 ページの著者で、私も一冊いただいてくまなく拝読したが、里瀬様は哈達河開拓団の人たちが集団自決した所と少し離れた所で激戦があった麻山峠で、ソ連軍の戦車の砲塔射撃に遭いながらも幸運にも生還されていることは奇跡^{てんゆう}、天佑である。

残留孤児たちの証言

この麻山で 465 体の屍^{しかばね}の下から奇しくも生存した 7 人の子供の中に、広尾町出身の幸ちゃんと正子さん姉妹がいる（私の担任 45 名中、6 名生存している）。終戦後 8 年目の春、父親に連れられ帰国するなり私宅に訪れた幸ちゃんは、一気に語った。

「先生！ 皆は水、水、水と言って、地を這^はって死んだんです…。死にたくなあーいと言って逃げ回る子も、全部バァーンと撃たれました。一人怪我^{けが}していた男の子は、ソ連兵が打ち殺しました。私は生きていたら殺されると思って、物を被^{かぶ}って死んだふりをして、母のそばで動きませんでした。夜になると死んだ母に取りすがって、三日三晩泣いていました。」

「中国人に助けられて、『中国人の子供だと言え』と教えられ、日本語を使いませんでした。父がやっと探して、後になって迎えに来てくれた時、父だとわかってても日本語を話せなくなっていました。それに、『日本人は人を殺す』と思って恐ろしく、父について帰りたくありません。父は遠いところを淋^{さみ}しそうに戻りましたが、また迎えに来ました。沢山のお土産を持って。でも妹は『帰らない』と土に爪を立てて泣き、私も養父母と父の間にはさまってどちらに行ってもどちらかが泣くし、悲しくて悲しくて、毛布を被って養母の後ろで泣いていました。」

毎日畑の草をとり、生き物の餌^{えさ}をやり、トーキビの粉で食事を作り、手も足もヒビだらけで痛くても何の薬もなく、鳥の糞^{ふん}をつけて…」

あのキューピーさんのように可愛^{かわい}らしく、秀才だった幸ちゃんが私と別れて以来の茨の道を、よくぞ挫^{くじ}けずに、賢く、たくましく生きてこれた。子供は一番正直である。幸ちゃんによって皆の最期を聞くことができた。まだ 5 人の児童が残留していると判明して私は、孤児となってしまった児童の救出に奔走した。

私が草取りをしている畑に遠くから男が訪ねて来て、「僕は誰でしょう？」と言う。「あら！ 生きていたの！」、それが互いの挨拶であった。「あの広い広い丘で、死にたくないと呼ぶ子を、なぜ

逃がしてあげなかったのか」——その時の状況を詳細に聞き出そうとする私に、次のように話した。

「僕はあの時 17 歳、白鉢巻をして馬に乗り、前後 4 キロもある避難の列を前後に飛んで伝令をしてたけど、一人のソ連兵もまだ見なかったし、弾も飛んでこなかった。けれど玉砕だと決まったらしく、僕は自決の場所の警備に山の上に行かされ、銃声が止んでから皆のところに戻ると、さっきまで話していた人が皆もうこの世の人でなく、『死にそこねて苦しんでいる人に止めを刺す』と言う人について歩いて、僕は驚きました。死体は、刀で切られていました。でもそこには日本人以外誰もいませんでした。」

聞けば聞くほど「何たることぞ！」だ。「天皇陛下万歳と三唱し、宮城遥拝して別れのあいさつを交わし云々…」と、まるで一糸乱れぬ見事な最期をしたと、自決をさせて生還してきている人の話と今の彼の話しと、幸ちゃんの話と、なぜ違うのであろう。私は清らかな心の幸ちゃんたちの言動を信じた。

＊

＊

＊

麗子さんの肉親はたくさんいても、真実の母が麻山で死んでいる。ほかの子も皆、母親に死なれている。孤児の身元を親身になって引き受けてくれないことや、肉親が日本にいたるためにかえって帰国できないという日本国の思いやりのない制度のために、孤児たちは泣かされた。東京で平和祈念講演会をする時になって、私は中国に残されたまま望郷の思いで病に伏している麗子さんを麻山事件の証人に呼んでと頼むと、あんなに「身元引受人…」とうるさく言っていた厚生省が、身元引受人なしで即刻永住帰国を認めた。

戦後 50 年も中国の地で苦勞し、白髪まじりになって帰国した麗子さんは、次のように証言した。

「私の母は自決を強要され、いきなり刀で切られました。私はその母の血^{ひまつ}飛沫で氣絶しました。中国の養父母の家はとても貧しくて着るものもなく、食べるもののなく、また履くものもなく、子守りなどをさせられ、一日も学校へは行けません。それでも中国の人たちは皆とても優しくしてくれて、精神的には救われました。間もなく養母が死んでしまい、私は自分と少ししか年の変わらない人たちの親代わりになり、一生懸命に育てました。食べ物らしい食べ物はなかったです。」

麗子さんの爪は黄色く、厚く、固くなっていて、50 年の苦勞を手、爪、体が物語っていた。

私たち日本人が忘れてはならないことのひとつに、中国の人たちが自分の食べる物もない苦しい生活の中にあって、しかも敵国の日本人の孤児^{ふびん}を不憫に思い、水のようなコーリャン^{がゆ}粥を分け与え、命をつないでくださったことである。この心こそ、人間が人間として本質的に大切な心、恵まれた生活の中では得難い温かい人間性であると思い、私は中国人民の温情を忘れない。

私は生徒可愛さのあまり、腹が立ってきた。そしてこの半世紀、悶々^{もんもん}の日々を過ごしてきた。何をしても楽しくなかった。「子供は逃げよ！」と、なぜ逃がしてくれなかったのか。はぐれながらも野を越え山を越えて一人で帰ってきている子もいるのにと、^{なみだ}涙にくれた。

哈達河在満国民学校

思えば、私の勤めた哈達河^{ハタカホ}在満国民学校は、広大な野の中に総煉瓦造りの全満一と言われるほどの綺麗^{きれ}な校舎と寄宿舎があり、四季の花々が咲く中で、通学距離の関係から小学校一年生の子から寄宿舎で教師と寝食を共にした。男の先生は朝早く自分で山羊^{やぎ}の乳をしばり生徒に飲ませ、私は毎日朝食前に子供たちの寝小便布団に熱湯を何杯もかけて洗う。校長が鼻をくんくんさせて洗い具合を点検した。

毎朝汗たっぷりかいて一日が始まり、何から何まで生徒と一緒に芋^{いも}ころを洗うようだった。鼻たれ小僧さん、泣き虫さん、告げ口屋さん、いろいろ。なかには若い私の肝だめしをする上級生の男子もいた。「その手に乗りませぬ」と、いつも笑顔で対処しなければならなかった。

給料は過分にもらったが、開けてみたことは一度もなかった。5 年間、そっくり母の掌に乗せた。

開ける暇も必要もなかった。

運動会には中国の学生が来校して日本人の観衆に向かって黄紅青桃等の大輪をかざして、「イーアルサンスウー、ウーリョウ、チーパー」と堂々と踊って見せたし、時には故国を遠く離れて国境守備に來ている関東軍の兵隊さんが学校に宿泊して、おこげを皆に食べさせてくれた。

自然観察の時間に生徒と船に乗ってムーリン河に流され、校長に叱られたこともあった。遠足、学芸会、収穫祭、材料が豊富なので、生徒と手作りの銘菓もどっさり作った。

夜は皆の寝姿を見回り、頭を撫で、明日の教材研究に夜半までかかり、寝小便の子を便所に連れて行き、やっと先生方は寝具に入れる。そうした 24 時間教育は、教師にとってはまことに「理想の教育」であった。純真無垢の子供に教えられ、天真爛漫な子らは教師の宝となり、深い情が移っていった。

慰霊の旅

「麻山の丘には 狼 くらいしか訪れないだろう」と思うと、どんな工面をしてでも慰霊に行きたくて、自分のことは全て節約して旅費を作った。残留の孤児たちと養父母の村へもささやかな送金を続けた。一日も忘れることのできない麻山である。

1999 年 10 月 3 日、腰の曲がった私と孫の二人は、由仁石材店の市川様が心を籠めて彫ってくださった御影石の碑 24 個を大事に持って、中国へ行った。「僕も慰霊がしたいから代金はいらないよ」と言い、鎮魂と彫った字は達筆な中国人をも唸らせた。

あちらの人は本当に來客の送迎を重視する。二人が林口に下車したのは駅に氷が張っている朝 5 時なのに、大きな主席先生はじめ 4 人の人が迎えに來て下さり、帰路は牡丹江まで送って下さり、初対面であることを忘れさせる温かい接待であり、その上花と果物を「仏さんに」と抱えきれないほど買って持たせてくれ、政府の車で遠く人家もない麻山の丘まで連れて行って下さったのである。

麻山の丘の樹々はほとんど裸樹となり一面に黄色の葉が厚く散り敷いていて、物音一つしなかった。しかし私には、涙をのんで死んでいった皆の泣く声が鬼哭 啾 啾 と迫ってくるのであった。浮かばれるはずがあるまい、ひどい死にざまをさせられて……。

日本人の死の山として誰も近づかないと聞く。「かわいそうだ」と言ってくれるのは中国人だけで、遠い祖国では国策として送り出された人々がここに眠っていることすら完全に忘れて、知らぬ顔をしている。人間って本当に悲しいものです。

中国側が当時を説明してくれた。

「一番先にこの麻山の日本人の死体に土をかけてくれたのは、この近くの村人たちです。穴を掘って埋めたものではありません。土をかけただけです。8 月 12 日という暑い日に死んだ体はどんどん腐って、その臭いが遠くの中国人の家々に風に乗って來て、生活ができない、我慢ができない。けれど、むごい姿に誰も近づけなくて遠くから見ていた。雨が降れば火の玉が飛んでくる。異臭にはこれ以上の我慢ができない。そこで皆は自分の生活を守るために、秋になってからやっと土をかけたが、大雨が土を洗い流してしまった。」

それで合点した。以前私は 1983 年と 93 年の二度來た時、この丘一面の草の中に白骨が散乱していた。その時は「慰霊なんてとんでもない、被害者は我々の方です」と言って慰霊行為一切を禁じた上に、時間は 30 分、撮影一切禁止、車窓もカーテンをして窓外を見せなかった。孤児にも厳しく逢わせなかった。

「孤児の問題は政府間の問題である」というわけで、面会したがる孤児たちを泣かした。そして、近くにある鶏西煤炉展覧館に案内した。日本人統治時代の残虐を永久に忘れぬためにと絵、写真、模型がたくさん展示され、「煉人炉では人間の油を採るほど大量の人を焼き、それでも焼くのが間に合わず万人坑に放りこみ、その数 6 万の死者」と記されていた。

私も哈達河で中国人民が捕虜となったひどい姿を見たことがある。それは延々と2キロ以上も続いた捕虜の列と私が一本道ですれ違った時のこと。足は鎖でつながれ、ボロボロ衣服から体が見え、汗と垢で真っ黒いやつれた体に風がうごめき、絶望の果てか幽鬼の姿で、のろりのろりと行進して学校の裏の飛行場へ行くのであった。そのあまりにもあわれな姿に、私は自国の憲兵を憎んだ。

中国の通訳がささやいた。「今でも中国の老人は皆、日本人を憎んでいます」と。

無辜の人民を武器に物を言わせて酷使し、このように恨み憎まれるのは当然。日本から携えてきた品を煉人炉の上に供え、心から哀悼した。こうした恨みも乗り越えて、自分の食も、住も、居もおぼつかない貧しさの中で孤児たちを引き取って自分の子として育てる深い慈悲の心、美德、大恩大徳に偉大なものを感じて感動する。

心優しい中国人に見守られながら孫と二人で祭壇を作ってお供えをし、香りのよい線香をくゆらせ、皆の写真も並べて読経した。弔辞も読んだ。集団自決というところまで来ると、どうしても言えなくなった。皆の悲しみが私にどっかと乗り移ってくる。喉はふさがり、家でしっかり練習してきた追弔和讃のご詠歌も、なかなか声にならなかった。誠に恨み綿々である。

＊

＊

＊

関東軍の兵隊さん、団長さん、哈達河の村人たち、生徒の皆さん、お母さん、兄さん、姉さん、ここには皆が黄色の落ち葉の下にいる……。じいっと横たわって50年……。

髻髻たる温容は、呼べど応えず。つたないながら般若心経を書写してきた用紙に一枚ずつ鎮魂の碑と菊花の落雁、線香をビニールに包み、狼に荒らされぬようスコップで深く埋めて回った。中国麻山政府からのお花も、リンゴ、バナナ、ナシ、ミカン、ブドウ、アンズも。皆、ありがとう。

野ざらしの骨を両手でしっかり温めて、私の熱い涙と共に般若心経に包んで、丁寧に埋葬した。人間って、こんなにかわいそうな存在なのか。何故だろう。互いに武器をもって殺し合い、挙句の果てに、何ら罪なき者まで殺してしまう。戦争で殺された者は山野に泣き寝入りさせ、忘れ去られてよいものでしょうか。

1941年4月1日に成立した日ソ中立条約は、1944年4月5日に、明年4月の期限満了後は延長しない意向であると、ソ連から通告を受けている。中立条約締結以前に戻るのはその一年後であるとソ連は通告を出し、その裏でせっせと対日戦の準備をした。

その通告を甘く見たのか？ 大本営の偉い人の苦悩は私ごときには分からないが、「主な抵抗は国境地帯に置き、この地域内で玉砕させる」、「あとは兵を後退させて南満要線で防衛やむなし」と策戦したようである。国境守備隊も国境地帯に入植させられた開拓団も、一般邦人も、日本の大本営参謀たちの判断一つで生死が決められ、捨石とされてしまったのである。

何とあわれなことであろうか。人間が人間を蹂躪して、野ざらしの骨の山を作ったのである。

「先生、どうして日本人の僕らが、日本人の大人から殺されねばならなかったのですか？」——見おさめとも知らず、ニコニコと別れたあの時の、あのあどけない生徒の声が、未熟だった私の胸を突く。

「いつかきっと代弁してあげたい」、いつもそう思っているところへ広尾町の里瀬様から、一筆書けと便りが来た。麻山の屍を見て生還した里瀬様の便りは、生徒の声とも思われて、真実の一部でもと思い、涙で書いた。

人間ほど優しく、美しいものはないと思う半面、人間ほど恐ろしく、残酷なものはないと思っている。

人間とは武器を持つことではない、心に慈悲の気持を溢れさせて、敵をも味方につくことだ。異国中に散乱させた野ざらしの骨に、深い深い哀悼を捧げずにはいられない。

ソ連兵に奪い去られた姉の親友

酒井 旭

星火方正 第9号（2009年12月発行）に“満州開拓団と居留日本人の悲劇の跡を巡る旅”と言う紀行文を書いたことがありました。その中で、下記のような 呼びかけをしました。

5. 姉のシベリア抑留

“方正”というところは佳木斯高等女学校の卒業生で佳木斯陸軍病院の看護婦として徴集された姉（16歳）たちが避難行の途中、ソ連軍に襲われ、同級生のひとりが拉致された場所として記憶にありました。その時の情景が、今回の旅行で知り合った打田さんから教えていただいた本 『従軍看護婦たちの大東亜戦争』（祥伝社、279ページ）佳木斯第1陸軍病院勤務 日赤救護班有志 “帰ってこなかった見習い看護婦”に記されていました。

「一列に並んで方正の司令部目指して歩いていた時、ソ連軍の兵士の乗ったジープが襲い掛かり、一人の見習い看護婦をジープに引きずり上げ、走り去った。“婦長殿助けて！軍医殿 助けて！！”と、暗闇に尾を引くような悲鳴を残して・・・」

姉の友人のその方（上田房枝さん）の消息は不明のままで、シベリア抑留から復員した姉たちが懸命になって探しても、手がかりになる情報は得られずじまいでした。青酸カリ自殺をされたのか？ 残留婦人になられたのか？？？ もし、この上田房枝さんという方が方正地区に残留婦人としておられたか？ 消息をご存じの方がおられたらご連絡ください。

5年後、平成26年夏のNHK番組“女たちのシベリア抑留”で、インタビューを受けていた 斉藤 治（旧姓：赤星 治）さんと言う方が 佳木斯高等女学校で、うちの姉（酒井 峯）と同級生で、シベリア抑留中 一緒に行動していた方であることを知り、山形市のお住まいを訪ねました。その時、思いがけない話を聴きました。

“峯さんは 生前、米沢から わざわざ訪ねてきてくださって、シベリア抑留中の話をしました。

特に 方正地区で ソ連兵に襲われた時、峯さんは仲良しの上田さんと手を繋いで歩いていたんです。いきなり 上田さんが引きずり上げられた時、峯さんは驚いて 奪い返そうとしました。でも ソ連兵は威嚇射撃をして 上田さんを連れ去ってしまいました。

峯さんは あの時、もし自分が上田さんの左側を歩いていたら 自分が連れ去られていた。上田さんは自分の身代わりに、犠牲になったのだ と涙を流して悔やんでおられました。”

姉は家族にも、勤め先の銀行の同僚にも、婚家先の家族にも シベリア抑留中の話は一切しませんでした。6年前に亡くなった姉の代わりに、平成26年春、NHKの取材を受けた時。“お姉さんから 何か聴いておられませんでしたか？” という質問に対して “我が家では「シベリアの話題」は禁句でした “ としか 応えられませんでした。

その姉が あの地獄の体験を共有した仲間とだけ 苦しい胸のうちを打ち明けていたんだ・・・

平成26年8月の NHKの番組の中で、上田房江さんの姉上が上田房江さんの最期を関東軍軍人から知らされたことを話しておられました。平成27年3月、NHK取材班の紹介で、上田さんの姉上にお会いし、戦後50年以上 “生きていて欲しい” という一縷の望みで探し続けた お話をお聴きしました。

その上で、“酒井峯さんが ご自分を責めることはありません。” と言ってくださいました。

この夏、米沢の墓地に眠る姉に 報告に帰る時、そのありがたい言葉を伝えようと思っています。

(さかい・あさひ：1931年大連生まれ、1946年日本に引き揚げる)

～「大東亜聖戦大碑」と護国神社～

寺沢 秀文

今年3月24日に延伸開業した北陸新幹線。その中で一大ブームを呼んでいるのが終点駅の加賀百万国の城下町「金沢」。その金沢にある日本三大名園の一つ「兼六園」のすぐ隣に「石川護国神社」というのがあります。皆さんはこの金沢市の石川護国神社に「大東亜聖戦大碑」と言う大きな碑が建てられているのをご存じでしょうか？ 写真を見て頂く通り、高さ12mという大きなものです。かく言う当方自身もまだ機会が無く実物は見ていないのですが、建立当時からその存在は知っていましたし、写真等では何回も見ています。

この「大東亜聖戦大碑」は、「日本をまもる会」という団体によって平成12年(2000年)8月に石川護国神社の参道に建てられたもので、この碑を建てる際にはこの「まもる会」が中心となって「大東亜聖戦大碑建立委員会」が設立されています。そして、その委員長は何とあの関東軍参謀の「草地貞吾」(くさち・ていご)元陸軍大佐という方でした。満州に縁のある方、あるいは関東軍に詳しい方ならばこの「草地貞吾」参謀の名前は聞いたことがあると思います。この草地参謀は昭和18年(1943年)に関東軍の作戦主任参謀に赴任、終戦と同時にシベリアに抑留され、日本に復員したのは昭和31年12月となっていますから10年以上も抑留されていたことになります。この時に一緒に捕虜抑留されていたのがあの瀬島龍三氏(せじま・りゅうぞう。関東軍参謀、後に伊藤忠商事会長等を務める)。この瀬島氏をモデルにしたとされる山崎豊子原作の『不毛地帯』は数年前にドラマにもなっていますが、その中で登場してくる「満州関東軍の幕僚・谷川正治」(橋爪功が演じ、主人公・竜崎正は唐沢寿明が演じていました)という人物はこの草地元大佐がモデルと言われているのだそうです。

この草地元大佐という方、戦後には当方の手元にもありますが『関東軍作戦参謀の証言』等の回想録も出版されています。また、戦後の経歴を見たら、驚いたことに昭和31年の復員後、日本大学の歴史学科で学んでいて(大学院か?)、ここを昭和39年(東京五輪の年)に卒業されています。この方、1904年(明治37年)のお生まれとのことですから、日大を卒業したのは61歳だったことになります。その後、草地元大佐は国士舘高校の校長なども歴任され、平成13年(2001年)に95歳の長寿でお亡くなりになられています。その人物像はさておき、「大東亜聖戦大碑」の建立委員長を務めたということからして、この方の右寄りの立ち位置が想像されます。

話を「大東亜聖戦大碑」に戻しましょう。この碑は平成7年(1995年)の国会で、「植民地支配や侵略行為がアジア諸国民に与えた苦痛を認識し、反省の念を表明する」とした「戦後50年決議」が採択されたことに対して、「亡国の謝罪」であると怒った前記の「日本をまもる会」が中心となって建立委員会を結成し、全国に寄付を呼びかけて作られたものなのだそうです。

この碑の正面には、「日の丸」の下に「大東亜聖戦大碑」と大書され、裏面には「八紘

為宇」(八紘一字ではないらしい)という文字が刻まれているそうです。他の資料によれば「八紘為宇とは全世界を天皇のもとに一つの国家にするという意味で、この碑は、大東亜戦争とは現人神(あらひとがみ)である天皇によって遂行された聖戦、すなわち崇高な戦争であったと賛えている」(石川県平和運動センター資料より)とされています。総工費1億円で建てられたというこの碑の平成12年の除幕式の際には、軍服姿の一团がこの碑の前で立つ写真も残されています。これが建てられた頃だったと思いますが、当方が日中友好協会の全国青年委員長を務めていた頃で、その委員会の際に石川県から来ていた委員から、この「聖戦大碑」の建設の動きがあることを聞いて、「何という時代錯誤、逆行だろう!」と大変驚いたことがあったことを思い出します。

現在もこの碑を維持する「大東亜聖戦大碑護持会」という会があるそうで、この護持会の会長は平成23年(2011年)の段階ではあの元航空自衛隊幕僚長で東京都知事選にも立候補、落選した田母神俊雄氏がなっていました。毎年8月初めの日曜日にこの護持会や前記の「まもる会」、そして石川護国神社、大東亜青年塾などが主催し、北国新聞社、テレビ金沢、エフエム石川などが後援して「大東亜聖戦祭」なるものが開催されているのだそうです。その平成23年の聖戦祭でこの護持会会長として田母神氏が挨拶されている写真が残されています。この「大東亜聖戦祭」なる催しの後援に北国新聞社が入っていますが、この北国新聞は地方紙43紙のうちで集団自衛権に肯定的主張を展開している3紙(他は北国新聞系列の富山新聞と福島民友新聞)の一つであり、テレビ金沢、エフエム石川もその系列会社です。

しかし、戦没者を祀るとする「護国神社」に先の大戦を「聖戦」とする大碑を建てる場所を提供し、この聖戦祭の主催者として名を連ねている「石川護国神社」、いったい何なのだろう? という気持ちになります。この碑を建てようという呼びかけがあった時、この石川護国神社にも深い関連を持つ「石川県軍人恩給連盟」や「遺族連合会」の一部からは「聖の字は必要ない」、「護国神社にこんなものを建ててくれるな」との声も上がっていたのだそうです。

勿論、「表現の自由」は尊重されなければならないものの、しかし、あの先の戦争を「聖戦」として、このような大きな碑が建てられていることに、またそれが戦没者を祀る「護国神社」に建てられているということに大きな違和感、嫌悪感、危機感を感じます。勿論、戦争犠牲者の皆さんには厚い追悼の意を表さなくてはならないと思います。国の礎として犠牲となった皆さんのことは決して忘れてはならないと思います。しかし、戦争の犠牲者は日本人だけではありません。他の多くの国の人々が日本が引き起こした戦争により犠牲になりました。その人々の命の重さは何ら変わらず、その戦争の責任の重さを思う時、あの戦争を「聖戦」と呼ぶことに大きな抵抗感を持ちます。

ところで、この石川護国神社を始め全国各地にある「護国神社」というのは一体どういう施設、場所なのでしょう? 以下は興味のある方だけお読み頂ければと思います。もっとお詳しい方もいらっしゃるかも知れませんが、当方自身の勉強も兼ねてということでご容赦ください。

当方も満蒙開拓平和記念館の専務理事ということもあって、全国各地にある満蒙開拓関係の慰霊碑についての調査にも取り組んでいます。ほぼ全国各地にあるこの「護国神社」

に満蒙開拓関係の慰霊碑が多く立てられていることが判ります。我が長野県でも松本市にある「長野縣護国神社」にも「満蒙開拓青少年義勇軍」の「斉藤中隊」と「佐藤中隊」のそれぞれの慰霊碑（但し、いずれも碑銘は「拓友之碑」となっている）があります。電子辞書「ウィキペディア」に拠れば、「護国神社」とは「国家のために殉難した人の霊（英霊）を祀るための神社。東京都を除く道府県に建立され、その道府県出身ないし縁故の戦死者、自衛官・警察官・消防士等の公務殉職者を主祭神とする」とあります。既述の通り東京を除く全ての道府県に護国神社があり、それも複数ある県などもあります（長野県でも松本の護国神社の他に諏訪市の高島城の中に「諏訪護国神社」があるそうです）。また、東京に無いのは、護国神社と同趣旨、というよりはその上位に位置する「靖国神社」があるからようです。

「護国神社」は元々は明治維新前後以降に日本各地に設立されていた「招魂社」が、1939年（昭和14年）に法律により一斉に今の「護国神社」と名前を変えています。そして、この「招魂社」と言うのは国家のために殉難した英霊を奉祀した神社だったそうで、昭和14年に「護国神社」に改称した段階で全国に131社もの護国神社があったそうです。そして、各地にあった招魂社のうち東京にあった「東京招魂社」のみはそれに先んじて1879年（明治12年）に明治天皇の命名により「靖国神社」と改称されています。したがって、「靖国神社」も、全国各地にある「護国神社」も元は同じ「招魂社」であったわけです。そして、「護国神社」は戦前は国内各地だけでなく海外の日本領有地等にも建てられていました。樺太護国神社（豊原市）、台湾護国神社（台北市）、朝鮮の京城護国神社（京城府）及び羅南護国神社（清津府）等が存在したそうです。ただ、いろいろな記録を見ても満州には「護国神社」があったという記録は見当たりません。これはあるいは前記の地域は当時は日本の領有地となっていたのに対し、満州は形なりにも「満州国」として独立した、日本とは別の国ということであったからかも知れません。

ところで、現在も全国各地に存在する「護国神社」、当然に現在は公立施設等の類ではありませんから基本的には自主財源により運営維持されていることになります。「護国神社」は主として戦没者の遺族会や戦友会、あるいは護国神社を奉賛する崇敬会、崇敬奉賛会などの組織が運営的、財政的に支えているようです。しかし、遺族、戦友等の高齢化と共にそういった組織自体の活動も停滞し、結果として財政的危機にある「護国神社」も少なくないのだそうです。前記にて、東京都内には別格である「靖国神社」を除いては「護国神社」は無いと書きましたが、かつて都内目黒区五本木にあった「目黒護国神社」は、これを維持管理する団体の後継者がいなくなってしまったために、平成20年に取り壊されてしまっているのだそうです。なんだか開拓団の戦後組織である開拓自興会などが高齢化のために解散等していったのと同じで、他人事ではないなあという思いに駆られます。

全国各地にある「護国神社」に立てられている満蒙開拓関係の慰霊碑を見ると、そのうちの多くが青少年義勇軍関係のものであることが判ります。これは青少年義勇軍が開拓団の一環ではあるも義勇軍と名乗っている通り軍隊の性格が濃く、前記の通り「護国神社」は主として軍人、兵士等の軍関係者、軍人遺族会等の慰霊的色彩が濃い施設であることも

関連しているのかと思います。

しかし、「護国神社」に祀られているのは必ずしも軍関係者だけではなく、後記の通り、満蒙開拓団の関係者も祀られているとのことですし、広島護国神社では原爆の犠牲になった勤労奉仕中の動員学徒、女子挺身隊員も祀られ、また沖縄護国神社では沖縄戦の民間犠牲者も祀られているとのことですから、民間人の戦没者も対象とされているようです。私事ながら、前述の松本市にある「長野縣護国神社」からは私の家にも毎年、ここに祀られているという長兄（1歳で長春の避難民収容所で病死）の合同法要の案内が届きます。かなり以前に確認したら、「護国神社」には戦没した兵士だけでなく、戦争で亡くなった民間人、当方の長兄らも含めて満蒙開拓団で渡満して現地で亡くなった民間人も対象となっているとのことでした。

基本的には「護国神社」と同格（または格上）である「靖国神社」では、その内規により合祀される者の対象が決まっており、下記のように分類されています。

①. 軍人・軍属

- 1) . 戦地、事変地、および終戦後の各外地において、戦死、戦傷死、戦病死した者。
- 2) . 戦地、事変地、および終戦後の各外地において、公務中に受傷罹病し、内地に帰還後、療養中にその受傷罹病が原因で死亡した者。
- 3) . 満洲事変以降、内地勤務において、公務中の受傷罹病が原因で死亡した者。
- 4) . サンフランシスコ講和条約の第11条にある裁判・判決によって死亡した者
- 5) . その他（略）

②. 準軍属その他

- 1) . 軍の要請に基づいて戦闘に参加し、当該戦闘に基づく負傷または疾病により死亡した者（満洲開拓団員・満洲開拓青年義勇隊員・沖縄県一般邦人・南方および満洲開発要員・洋上魚漁監視員）。
- 2) . 特別未帰還者の死没者（ソビエト連邦・樺太・満洲・中国に抑留中、死亡した者・戦時死亡宣告により死亡とみなされた者）。
- 3) . その他（以下略）

多分、「護国神社」においても同様の基準で戦没者等が祀られているのだと思います。そして、私の兄などは上記の②の2に該当するのだろうと思われます。しかし、「靖国神社」も含め、この「護国神社」に祀られている戦没者等の遺族の中には、如何に戦没犠牲者の慰霊とは言え、軍国主義的な色彩を有する「靖国神社」や「護国神社」に祀られることに違和感を持ち、「私の亡き家族はそんな所には行っていない！」とここで祀られることを強く拒否される方もいらっしゃるようです。また、「靖国神社」や各地の「護国神社」の中の一部では、先の大戦自体を肯定するようなスタンスにある場合もあること等から、これに対する拒否感が強い方が多いのも事実です。ご存じの方も多いでしょうが、靖国神社にある「遊就館」はかなり軍事的な色彩の濃い施設ですし、また前記の通り、「石川護国神社」には「大東亜聖戦大碑」なる大東亜戦争を聖戦として礼賛する碑まで建てられているのにはやはり大きな違和感を感じ得ません。

戦没者に敬意を表すのは当然のことながら、あの戦争を「聖戦」とすることだけは絶対に納得できない思いです。

（てらさわ・ひでふみ：満蒙開拓平和記念館 専務理事 当会理事）

天を恨み、地を呪いました

松田ちゑさんの半生・94春秋

奥村正雄

(1)

■花筏を見ながら

晴れたが風が冷たい。4月9日午後、地下鉄の駅を降りて7、8分。橋を渡りかけると水面の花筏に、また桜の花びらが舞い落ちる。目の前に10階建ての都営住宅。エレベーターを降りる。鉄の扉をノックする。息子の崔鳳義さん(68歳)が顔を出す。目に特徴がある顔が、私と知って和む。

「まだ戻ってないだろ？」

「まだ」

松田さんがデイサービスから戻るのが夕方5時過ぎと聞いていた。その30分前に訪ねたのだ。ダイニングルームの食卓をはさんで向かい合う。

「最近は、一緒に暮らしている家族でも、顔を見て他人だと思ったりするんだ。午前はまだいいが、午後になると分からなくなることがあるんだよ」

言いながら煙草に火をつける。

「1日、何本吸うの？」

「10本」

「以前は？」

「前からずーっと10本だよ」

テーブルの端に置いた水槽で大きな金魚が6匹泳いでいる。10年も前から金魚の顔だちも、酸素を送る音も、少しも変わっていないように思う。

ブザーが鳴る。崔さんが立ち上がって玄関へ。外からドアのノブを回す音がして、廊下に松田さんが載った手押し車が見える。ヘルパーさんが松田さんを開いたドアにつかまらせる。崔さんが松田さんの手を取って靴を脱がせ、上がり框(がまち)に上がらせる。そこからはもう松田さんが自力で行動を始める。



■「アオツォンだよ！」

松田さんは、玄関を上がってすぐ右のトイレに入る。7、8分も出てこない。やがて中で一人で身づくろいをちゃんとして、スリッパをはいて出て来た。

私がいるのに気づく。

「アオツォン(奥村)だよ」

と崔さん。

「ああ、オクムラさん」

松田さんの表情が良い笑顔に変わる。

息子が入れたお茶を一口、飲む。

「私はね、良い息子に恵まれて幸せです」

と松田さん。

「それは松田さんが良い息子に育て、良い嫁に育てたんだよ」

と私。

柔和な顔で松田さんがお茶を一口すすする。1年前に訪ねたときは嫁の閨永革さん(66歳)が松田さんに尋ねた。

「この人、誰か知ってる？」

以前はよく知っていた人でも、その人の名前がもう出てこなくなっていることが多くなってきた姑の老化を、計るように閨さんが聞いた。

「オクムラさん」

松田さんは目の周りに微笑のしわを寄せて答えた。私は胸が熱くなった。

今日は、その閨さんが外出してまだ帰ってきていない。

去年まで、閨さんは、この家を空けることが、なかなかできなかった。すぐ

近くに住んでいた二人の娘(松田さんにとっては孫娘)の崔穎(松田幸子)さん(40歳)とその下の崔麗(松田麗子)さん(35歳)、がそれぞれ仕事に出ている間、4人の孫たちが保育園から帰ると、まずこの家で2人の母親が仕事から帰るまで待っていた。その世話をしていたのが閨さんだった。その2人の娘がそれぞれ近くに自分の家(マンション)を買い、子供たちも大きくなったので、閨さんはこの日、所用で出かけて、まだ帰宅していなかったのだ。

■「箱積み」でビリ

「これがね、デイサービス・センターからもらう報告なんだよ」

崔さんが奥からプリントの綴じ込みを持ってきて見せてくれる。デイサービス・センター「なごやか・ときわ台」が日曜を除く毎日、朝8時半に、玄関先まで迎えに来て松田さんを手押し車に乗せ、デイサービスセンターに運び、1日をどう過ごしたか、の簡単な日報だ。

＊

本日も笑顔で来所され、午前中に入浴しました。(入浴は2日に1回)
午後のレクでは「箱積み」を行ない、結果はビリでしたが、よく頑張っておられました。

＜要介護 5＞

体重 35.9

脈拍 81

血圧 125－68

活動 技能訓練、塗り絵、体操、リクレーション、カラオケ

■悔やんだ羽田監督

いまから8年前…2007年、松田さんが、同じこの家から、少し足を引きずるような歩き方だったが、背にしたザックに嫁の閨さんが作ってくれた弁当と果物を入れ、一人でエレベーターを1階へ降りた。そこから、ゆっくりした足取りでバス通りに出、すぐ近くのバス停まで歩いた。その様子をずーっと映画のカメラが追っていた。映画監督・羽田澄子さんが撮っていた記録映画『嗚呼 満蒙開拓団』の1カットだった。

「10年前に撮りたかったね」

羽田さんが悔やんだ。

■14年前の松田さん

その6年前、2001年、松田さんは、この時と同じように、少し足を引きずって通りに出てすぐのバス停まで歩き、都営バスを待った。川を1本超えた次の停留所「高島平第一中学校前」で降りる。その目の前が「高島平ふれあい館」だ。玄関まで200メートルほど、ゆっくり歩く。9時開館までまだ15分ほどある。温水植物館の前でひと休みする。9時、ゆっくり立ち上がると、開館を待ちかねた老人たちと玄関へ向かう。

「さあ、極楽浄土の門が開いたよ」

元気な老人が威勢をつける。

足腰のしっかりした老人たちが先を争うようにして中に入る。松田さんは手すりにつかまりながら、広い階段をゆっくり2階へ上がる。和室の大広間。各人、自分の座るところはほとんど決まっていて、そこへかばんやデイバッグを置き、座布団やポット、お茶道具などを運んできて、仲間どうし話が始まる。松田さんは足が少し不自由なので、いつも元気なKさんが座布団を持ってきてくれる。

「はい松田さん、13番だよ」

仲の良いTさんが舞台袖に置いてあるカラオケ申し込みのノートに自分と松田さんの名前を記入し、番号札を持ってきて、松田さんにその1枚を渡す。

10時少し前、大広間の正面の舞台に、健康体操の保健婦さんが登場。

「さあ、健康体操の時間ですよ。ゆっくりと足腰を伸ばしましょう」

老人たちは、それぞれの場所で立ち上がり、保健婦さんの指導で足腰を伸ばしたり曲げたり、手首を回したり。

「はあい、おしまーい。では今日も元気に歌ったり、踊ったり、楽しく過ごしましょう」

その声が終わるか終らないうちに踊りの音楽が響き始める。『板橋音頭』で全員参加の肩ならし。それが終わってカラオケ大会がスタート。皮切りのAさんが『男船』を歌い始める。そのバックでCさんが躍る。DさんとEさんがデュエットで『浪速恋しぐれ』だ。

「うまいぞ！」

歌い終わった二人に満場、大きな拍手。調子っぱずれの老人の歌も少なくないし、バックで踊る人たちの中には、リハビリがわりに手足を動かしているだけの老人もいる。

13番、松田さんの番だ。歌は松田さんが作詞し、館長が作曲してくれた『花の板橋ふれあい館』。

朝日輝くふれあい館

今日も愉快地暮らそうよ

お風呂にや笑いの花が咲く
ぐるぐる回るマッサージ
自動アンマの気持ちよさ

詩は5番までである。松田さんはこれを最後まで歌う。歌はうまいとは言えない。ただ毎日、一生懸命うたう。

お昼。松田さんは友達と弁当を開く。1階の売店で弁当やパンを買ってくる人も少なくないが、松田さんは、いつも嫁の閻永革さんがつくってくれる弁当だ。

プラスチック2段重ねの上段には、今日は松田さんの大好きな鮭、卵焼き、豚の骨つきばら肉を長時間煮込んだもの、絹さやの煮物、キュウリのおしんこ。

午後になって松田さんの2曲目の出番が来た。初めて歌ってみることにした『支那の夜』。若い頃の記憶を頼りに松田さんが歌い出すと、いつのまにか、一人の男性が背後に立ち、松田さんが一番を歌い終わったところで、思い入れたっぷり、昔懐かしいセリフをマイクにのせる。

赤いランタン波間に揺れて
みなと上海 白い霧
出船入船 夕空の
星の数ほど あればとて
... ..

思いがけない助っ人の登場と、何十年ぶりにきく懐かしいセリフに松田さんは胸が熱くなり、そのまま絶句してしまった。

この頃、松田さんがまだ中国黒竜江省の方正県で、祖国日本へ帰る当てもなく苦勞していた時に知り合った人から、こんな詩が送られてきた。

もうひとつの靖国神社

郝 薰 華

九段では
春 爛漫の桜花の下
秋 菊薫る澄爽の中
「国のために犠牲になった」人を
慰霊する大祭が行なわれます

八月十五日
ある総理は公式に
ある総理は私的に
ある大臣は公式に胸を張って
ある大臣は私的に意地を張って
手を合わせ 玉串を捧げます

方正ではその頃

春 松花江の氷がようやくゆるみ始め
秋 炮台山おろしの寒風が肌を刺す頃
だれひとり訪れるものもなく
墓碑を取り巻く樟子松の
乾いた嗚咽が聞こえるばかり

五族協和 王道楽土とはやされ
開拓地で見た真っ赤な落日

ソ連の戦車に囲まれ
飢えと寒さの逃避行
気がついた時は
日本軍も高官の家族も
とっくにもぬけの殻でした

集団自決
痩せ衰えた子供、年寄りを道端に捨て
河に流し
たどり着いた方正で
毎日 毎日
うず高く積み上げられた骸の山

これは「国の犠牲」ではなかったのですか
九段に眠る同胞と同列に席を与えられるべき人たち
ではないのですか

今から35年前
ここに建てられた「方正地区日本人公墓」
中国でたった一つ
ここだけに許された日本人公墓
この建設もその後の管理も
中国側に任せて知らぬ顔ですか

それでもまだ
「日本の国のために戦った人の霊を公式におまつりできないのは、やはりおかしい」
と、
中国、朝鮮はじめアジア諸国侵略の元凶たちをも祀る
九段にだけは

頑なに公式参拝ですか

生きて見捨てられ
死んで五十年も見捨てておいて
いままた
国を思う心を養うために
国旗国歌法ですか

もう今年も訪れる人がなくなった公墓の
小黒楊の枝が
また炮台山下ろしの冷たい風に
すすり泣くばかりです

(1999年10月)

(2)

■山の方へ逃げろ

1945年8月15日、松田ちゑさんは三江省依蘭県第8次北靠山屯村山開拓団で、朝早く草刈りに出た。昼に帰宅すると部落長が全員を集め、開拓団本部からの重大連絡を伝えた。

「日本は戦争に敗けた」

「早く部落を出ろ」

「遅れるとどんな目に遭うかわからない」

と言われ、あわただしく部落を後にした。難民の長い行列が国道に出てまもなく、日本軍が行列を見つけ、

「国道に出るな。ソ連軍が松花江を渡ってこちらの方に進んでくるから山の方へ逃げろ」と言う。ここで日本軍と一緒に、山の奥へ奥へと逃げた。

「1日、2日、3日は背負ってきた米もありましたし、谷間には水があり、ご飯も炊けました。しかしだんだん山奥へ入るにつれて、水も米もなくなり、1週間も山中にいるうち食べ物は何ひとつなくなりました。毎日、涙雨が降り続けました。みんなズブ濡れの鼠になり果ててしまいました。みんなブドウの蔓、葉っぱの茎をしゃぶりながら、重い足をひきずるようにして歩きました」

特に子供たちは疲れて空腹に泣きながら母の手に引き連られ、幼児を背負った母親は力が尽きそうになって歩き続けました。

こんな日が10日も続いたある雨の降る夜、暗闇で一寸先も見えないので、ここで夜を明かそうと木の下で休んでいました。近くに何か黒く見えたので、怖い気もするがなんとなく気になりました。静かに近寄って、よく見ると二人の子供がやせ衰えて死んでいたのです。死体を見たのは初めてです。今でも目に焼きついています。(略)2人の子供を背負って張り切ってきた結城正吉さんの奥さんの小さい子供が、背中の上で死んでいたのもこの頃でした。このように、まず子供の死亡が日に日に多くなっていきました。それに続いて年寄りも疲れと飢えから倒れる人が出てきました。

団部落を出発したのは8月15日です。それから山奥に逃げ、今日はもう26日です」(『開拓残留妻の証言』)

川幅50メートルほどの急流では、途中で避難民と合流した日本兵が、対岸の木の根にロープを結んで子供たちを背負い、渡渉させた。しかし疲れと飢えで体が弱り切っていた避難民たちは急流を渡る力が弱く、ロープから手を離して急流に消えて行った年寄りも少なくなかった。

すでに、開拓団が立ち去った開拓団部落に入る。途中合流した開拓団が7、8か所、それに日本軍も加わって総勢3000人余の難民となっていた。ここで進駐したソ連軍が日本軍を武装解除。8月15日に日本の敗戦は耳では聞いていたが、山と積まれた日本軍の引き渡し武器を目の前にして、松田ちゑさんはあらためて日本の敗戦を実感したのだった。《街に入りますと、道路の両側の中国人が、列を作って黙々と歩く哀れな難民を見送っていました。街では食べ物をたくさん売っていました。私はハルピンまで何日かかって着くものやら、また山中に入れば食べ物がなくなるからと思い、少し買って行こうと店に入りました。そこで売っている乾パンは日本軍の乾パンでした》

日本軍の食糧、軍服、乾燥野菜、米、粟その他すべての日本の品物が中国人の手に入り、ソ連軍が奪い合っていました。日本の品々を日本の難民は十倍も高い値段で買って食べなければならなかったのです。

私も生き続けるために、子供を背中に、衣服に縫い付けた少しのお金を取りだし、200円で乾パンを2袋買って街を出ました。間もなく、山道や坂道を登ったり下ったりで、

雨上りの道は悪く歩くのも困難でした。

十何日も山道を歩いたので、団を出る時の靴もほとんど切れて、どの人も素足になっていました。足に木が刺さり血を流しながら歩く人、子供たちも怪我が絶えなく、足を引きずりながら母の手にすがり、泣き泣き歩く子供たちが可哀そうでした。(略)

40里、50里と歩く途中、子供と年寄りが疲れと飢えから倒れる人が続出してきました。それらの死体が置き去りにされました》(同)

■方正の煙突は見えただが

やがて松田さんたちの一行は方正街の煙突が見えるところまでたどりつく。難民たちの胸には、生きて祖国へ帰る思いしかなかった。松田ちゑさんの一行に限らず、方正を目指したすべての難民・老幼婦女子たちにとって、方正は祖国へ帰るための一つの通過点のはずだった。方正の次はハルピン、その先がまっすぐ祖国日本につながっていた。

だが、方正の煙突が見えるところまでたどりついた松田さんたちの一行は、方正の街には入れずに、街から6キロほど離れた伊漢通開拓団へ行くよう指示される。

《ここは開拓団が引き揚げたあとの家屋なので、戸障子ははがされて空き家になっており、ここが収容所となっていました。3000人からの難民は、5つの部落に分けられました。

私が分けられた部落は、人家が26軒で馬屋が2軒でした。1軒に開拓団の一つの部落の人が全員寝泊まりして、そこで収容所生活が始まったのです。昭和20年9月3日から方正県の伊漢通開拓団部落5班という収容所で生活することになりました。収容所に入るのはわずかな期間だけで、間もなくハルピンに出て、そこから懐かしい祖国日本に帰れるものとばかり考え、その日を楽しみにすべてを忍んでいました。しかしその機会もなく、ここで冬を越さなければならなくなったのです。その上食べ物はなく、体は弱まる一方でした。ここの開拓団の人が残して行ったトウモロコシと大豆を畑から取って食べていました。しかし、あんなに広い畑の食糧も半月と持たず、平らげてしまいました。収容所生活となってから栄養が不足し、その上寒さにも耐えられずに、子供と年寄りはいくつと亡くなっていました。》

＊

松田ちゑさんたちの一行が伊漢通開拓団跡に入った9月3日、ほかの地区から別の逃亡

ルートを経てここにたどり着いた老幼婦女子の一行も大勢いた。埼玉県が送り出した小八浪中川村開拓団（三江省樺川県）もその一つである。樺川県に展開していた開拓団は、松田さんたちが入植した伊蘭よりも北でソ連国境にも近いと、混乱と犠牲はさらに大きかった。

■子を遺棄し、絞殺し

《8月18日 漸く七虎力河の渡渉完了、前進して柞木台地区に入る。橋梁は皆、被破されて一つもない。凹地に入るや、戦闘はまたいよいよ激烈。反乱軍はここに待ち伏せ、われわれ婦女子部隊の全滅を図ったものと思われる。情報をさぐればこの匪団は反乱軍の大部隊で、騎馬部隊から砲まで持つ大部隊とのことである。

いまや絶体絶命、各団の幹部は重傷の警察署長を中心に協議、いよいよ最後の時と決意して、敢然闇をついて敵陣に斬り込みと衆議一決……これを聞き一同は各々最後の覚悟を決め、本団の木村儀三氏は愛妻に因果を含め、自分の手にかけて一切の後顧の心配を絶ち、単身斬り込みの用意をする。また婦女子はおのおの傷つける身に軍刀、手槍を持って斬り込む決意をする。壮烈悲壮の状況……》（全国拓友協議会発行『満州開拓史』）

こうして死地をくぐり抜けて8月19日、大平鎮に到着し日本軍と合流、伊蘭街道を経て団山子へ。

《8月21日 早朝、軍の命令を聞けば、今日の行軍15里とのことである。ために女子供たちは驚く。そしてある者はここで絞殺したり遺棄したりした。私の母も孫を背負ったまま、この朝、行方不明となる。さながら生き地獄そのままであった。

伊蘭の状況險悪の報に路程を変えて老爺嶺入りと決定、軍とともに強行軍を続けた。老爺嶺に入るや一時銃声はとだえたが、森林深まるにしたがって、神代木の森林昼なお暗い山中を露営に露営を重ねつつ、谷間は膝を没する湿地から、丈なす草をかき分けての行軍は、歩兵部隊すらきわめて困難とする。この山中の行軍、まして子供をつれての婦女子老人部隊の行軍、いかに苦闘の極みであったかは言語に絶するものがあった》（同書・第7次集団中川村団長、堀口辰三郎氏）

＊

中川村開拓団の一行は、こうした苦難を経て8月31日、ハルビン街道に出て有山部落

で露営、この夜、ソ連軍使と通訳から初めて敗戦を知らされた。

9月2日、ここでソ連軍によって武装解除され、方正に連行された。

9月3日、伊漢通開拓団跡の収容所に入ったが、中川村開拓団の総人員274名、避難中の犠牲者64名と記されている。

同書堀口氏の報告によれば、9月5日から、この収容所における難民生活は、それまでのソ連軍による管理から各避難民部落の自治に切りかえられたという。誤った命令とデマで。

佳木斯からさらに北、ソ連との国境により近い入植地にいた開拓団であっても、無事にハルピンへ脱出できた人達もいた。たとえば鶴岡方面の静岡村開拓団員等約700名は8月9日、10日に佳木斯より南の集団第2次千振村開拓団に避難した。彼らが目指したのは牡丹江経由、汽車でハルピンへ避難することだった。しかし林口、牡丹江が爆撃されたため急きょ計画を変更、反転して綏化線で綏化へ向かった。

この千振開拓団に避難命令が出たのは8月11日、その前日10日開拓団の残った男子50名は根こそぎ動員で応召されていた。12日、飛行場に全員集合、その数約1000名、この第1隊は翌13日午後、汽車で佳木斯経由綏化へ向かった。

周恩来と国際主義的精神

第1回

大類 善啓

本文掲載に当たって

2012年7月、第8回方正友好交流の会の記念講演会後、事務局参与の牧野史敬氏が、翌2013年は方正日本人公墓が建立されて50年目になるが、かつて我々が刊行した『風雪に耐えた「日本人公墓」ハルビン市方正県物語』が絶版になっているので、新たな本を発行してはどうかというアイディアを東洋書店の斉藤春夫氏に出したところ氏も賛意され、『日中の未来を見つめる 日本人公墓—中国黒竜江省方正県』（仮）を出版しようということになった。満洲移民の背景なども含めて若手研究者の論文を中心に編集していこうということになり、小生も最終章に、日本人公墓建立を許可した周恩来の国際主義的精神がどのように形成されていったのかをまとめた「周恩来と国際主義的精神」という本稿を書き上げた。しかしこの出版企画は諸般の事情で流れてしまった。そこで拙文だけを独立してここに掲載することにした。すでに書き上げて2年余は経っている。読者諸氏のご叱正をいただければ幸甚である。

はじめに

周恩来は中国の総理として、方正県にある日本人公墓建立を最終的に許可した人である。日本の侵略の傷跡が中国の人々の体と脳裡に生々しく鮮明に残っていた時代に、侵略した側の日本人のお墓を建てるなどということは、世界史的にも珍しいことだといえるだろう。

方正県の砲台山に広がる累々たる白骨の山を見た残留婦人の一人、松田ちゑさんは驚くとともに嘆き、県政府になんとか自分たちの手で埋葬させて下さいと願い出た。1963年のことである。対応した県政府の役人が、「侵略者の白骨など埋葬できるか」と一言の下、その願いを切り捨ててもおかしくはない。しかし県政府の役人はそうはしなかった。上級の黒竜江省政府にどうすべきか、と聞いたのである。省政府がここでも却下できたはずである。しかし省政府もそれをせず、中央政府に判断を仰いだ。最終的には外交部（陳毅外相）を経て周恩来総理の手を経て公墓建立が許可された。

日本の敗戦後から13年間、中国人とともに働き生活した体験を持つ方正友好交流の会（以下、方正の会と略す）顧問・金丸千尋氏は、こう記している。「日本の侵略によって被害を受けた悲惨な体験を味わった中国民衆の日本への反感が強い状況の下で日本人の＜公墓＞を建てることがいかに至難であったかがよくわかるのである。この難問に現地の方正県、黒竜江省の関係者は人道主義の立場で問題解決のため奔走し、中国人の感情、日本人の心情、これがもたらす影響などいろいろなことを考慮して中央政府に申請し、最終的には周恩来総理みずからの決裁によって中国の手で＜公墓＞をつくってくれたのである」（方正友好交流の会会報『星火方正』第5号）。

周恩来は常に、日本人民も日本の軍国主義の犠牲者であると発言、日本の軍国主義と日

本人民を区別するよう指導した。マルクス主義者である中国共産党幹部にとって、国際主義は自明のはずである。しかし現実には必ずしもそうではない。とりわけ権力を握り、時間が経つに従って変節してしまう。そのいい例がソ連のスターリン時代である。世界革命を呼号したレオン・トロツキーが結果的にスターリンの陰謀に破れ去った後のソ連では、革命を担った多くのユダヤ系の人々が葬られ、世界共通語であるエスペラントを信奉するエスペランティストたちを弾圧するなど、マルキシズムが持つ国際主義的精神はほとんど有名無実にならざるを得たのである。

本稿は、周恩来という人間に体现された国際主義的精神とはどのようなものであったのか、またそれはどのようにして生まれていったのかを明らかにしつつ、周恩来その人の思想と人間性を、彼の生涯を見ながら考えてみたい。

1) 卓越した政治家・周恩来

革命家は政治家である。しかし政治家は必ずしも革命家ではない。

20 世紀にそれぞれの国で生きた革命家たち、例えばロシア革命を牽引したレーニンやトロツキー、大国アメリカを向こうにまわしてベトナム戦争を勝利に導いたホー・チ・ミン、キューバ革命を成功に導いたフィデル・カストロやチェ・ゲバラたちが、その後の建設過程では必ずしも優れた政治家とは言えなかった。

トロツキーは宿敵スターリンに敗れ去り、最後はメキシコの地でスターリンの追っ手によって暗殺された。チェ・ゲバラは、革命後のキューバをどう建設していくかという課題よりも、ラテンアメリカ全体をどう革命に導いていくかという過程で殺された。

このような革命家たちを見ていくと、周恩来のように革命家として生き、革命が成功した後の建設時代においても、現実政治家として卓越した手腕を発揮した存在はまことに稀有な存在だと言えるだろう。

周恩来を知る多くの人たちは、死して 40 年近くなろうとしても、そのこまやかな心づかいと誠実な人柄に涙を流し、周恩来を追憶する。ある人は、孔子の再来のように周恩来を語り、追慕する。しかし、周恩来といえども人間である。とりわけ 1966 年から中国全土に吹き荒れた「文化大革命」の時代において、「私が地獄へ行かずに誰が行くのか」というほど苦渋に満ちた行動をせざるを得なかった。厳密な意味で、文革時代の周恩来はまだなお、評価が一定していない面もあるのだ。

文化大革命の時代の資料はまだ 3 割しか公表されていないともいう。それがすべて公表された時、周恩来の評価が今のままであるだろうか。

しかし周恩来がいなかったら、1949 年の新中国建設はなかったろうし、あの動乱の文革を收拾し、次の新たな開放経済体制に向けた改革開放の時代は到来しなかっただろう。

1930 年代、周恩来の首には 10 万元の報奨金がついていた。国民党の指導者・蒋介石は、「周恩来さえ捕まえれば、共産党は崩壊する」と側近に語った。周恩来は実際そのような存在だった。

方正日本人公墓の建立が周恩来の存在抜きに考えられないように、後に触れるがおよそ 1000 名近い日本人戦犯が撫順戦犯管理所から生きて日本に帰還できたことも、周恩来抜きには考えられなかったといえるだろう。

2) 対日関係で見せた周恩来の国際主義的精神

八路軍（中国共産党解放軍の前身）の捕虜になった日本軍の兵士たちが、八路軍の教育によって徐々に日本の侵略戦争反対の立場に立って日本人反戦同盟に加わり、延安の日本労農学校で学んだ。その開校式で学生代表が述べた言葉がある。

「日本の侵略的軍隊の兵士であるわれわれを、八路軍は敵兵として侮辱しなかつただけでなく、完全な自由と平等と安全と物質的なよい待遇とを与えてくれた。われわれを友人として、兄弟として、同志としてとりあつかってくれた。ここにきてはじめてわれわれは、世界の無産者は兄弟であること、日中両国人民は兄弟であること、国際主義の精神とは何であるかを知ることができた。はじめてわれわれは本当の人間らしい精神を持つことができた。八路軍の将兵諸君、ありがとう。諸君にわれわれは心から感謝する」（香川孝志・前田光繁著『八路軍の日本兵たち』）

新中国が建国される前から、中国共産党の中にはしっかりと国際主義的な精神が息づいていたのである。ここでいう国際主義とは、国家や国境を超えて、労働者、人民が連帯して闘い繋がっていかうという考え方である。いわばプロレタリア国際主義であるが、中国の場合その根底に、東洋的というか中国特有の、いわば一視同仁という精神、すなわち環境がどのようなであれ、人々に対して一様に、仁愛を施そうとする考えがあるように思われる。

命からがら逃げてきた庶民を置き去りにし、自らの家族たちだけを慌ただしく帰国させた関東軍幹部たちの姿を目の当たりにしている金丸千尋氏は、「中国人の他人の痛みを知りいたわる心は、敗戦時の関東軍上層部の醜悪の対極にあるもので学歴や知識水準とはまったく無関係の徳性といえよう。これは五千年の悠久の歴史があり、偉大な中国文明を創造し、“人生いかに生きるべきか”を説いた老荘思想や儒教の伝統をもつ中華民族、また陸地続きの多民族との共生、長い戦乱などの環境のもとで人間同士が助け合い、忍耐強く強靱に生き続けた中で培われたものに違いない」（『星火方正』第5号）と指摘する。

いわゆる留用政策も、そのような懐の深い中国人の性格を表しているのかもしれない。留用とは、一定期間留めて任用するという意味の中国語である。日本敗戦後の来たるべき国民党との戦争に不可欠の医者や看護婦など医療関係者や工業分野の技術者に対して、中国共産党は、中国に留まって新たな中国の建設のために働いてくれるよう要請した。

止むを得ず残った者が多かったが、中国への罪を認めて新中国に役立ちたいと自ら残留を決めた日本人もいた。例えば大連にあった満鉄中央試験所の丸沢常哉所長は、中国への贖罪意識から自ら残留することを決意された。前出の金丸千尋氏も自ら八路軍に入った一人である。そういう人たちが留用日本人といわれる人たちである。

この留用政策は中国再建の礎に少なからず貢献した。周恩来は日本からの訪中団に何度かそのことに触れている。例えば1954年10月11日、日本の国会議員訪中団と学術文化訪中団と会見した際、こう語った。

「我々は日本と15年戦ってきたが、日本軍が武器を捨てた時から日本人は中国人と仲良くなり、中国人も日本人を友人として扱い、恨みを持たなかった。最も生き生きとした事例が東北にある。多くの日本人日本軍人が武器を捨てた後帰国せず、一部の居留民とともに中国人民解放軍に参加した。病院の医師と看護婦、工場の技師、学校の教官・・・ほと

んど立派に働いて我々を助けてくれた。我々は深く感謝している。これが友情であり、これこそが真の友情といえる。これこそが我々の友好の種子なのだ」。

3) 撫順戦犯管理所の奇蹟

日本人戦犯の処遇問題もあった。旧満洲にいた子供を除く 40 歳以下の日本の男たちは、敗戦直前までにほとんど現地召集されたが、敗戦と同時にソ連によってシベリアに捕虜として連れて行かれ苛酷な労働に従事させられた。彼らは新中国が成立した後、ソ連から中国に引き渡され撫順戦犯管理所に入れられた。1950 年 7 月である。その数およそ 1000 人は、当初はすぐに裁判にかけられ処罰されるものと思われた。

戦犯管理所に入れられた男たちは自暴自棄になり、中には反抗的な振る舞いをする者もいたが、中国側の管理に当たった職員たちは、日本人の人格を傷つけるような言動は取らなかった。後年、「鬼のような日本兵が人間性を取り戻す」ようになった撫順戦犯管理所での人間改造劇はこうして始まった。この撫順戦犯管理所での日本人処遇政策の最高責任者が周恩来だった。

かつてこの管理所にいた高橋哲郎氏（元中国帰還者連絡会事務局長）は、2010 年 2 月、盛岡市での「加害と再生の地 撫順戦犯管理所から学ぶ」という講演で次のように語っている。

「自分たちが満洲でやったことを考えれば、もう生きて帰れることはない、自分たちはここで殺される」と思っていた。戦犯といえば東条英機や板垣征四郎のような戦争指導者たちだと思っていた彼らは、「自分たちは戦犯ではない、捕虜だ。捕虜なら捕虜として取り扱え」と管理所に要求した。中国側はすぐにその要求を受け入れた。

日に三度の暖かい食事は、魚、スープ、饅頭、時には蜜柑、ピーナツ、飴玉がついた。出された食事は、高粱（コーリャン）飯だったが、「自分たちは日本人だ。高粱飯など食べない。米の飯を出せ」と要求すると、米の飯が出てきた。

周恩来の、「日本人には日本人の民族的な生活習慣がある。だから、それを大事にして米の飯を出しなさい。他の生活習慣も大事にしなさい。それから捕虜を殴ったりするな。罵るな。戦犯も人間だから、その人間の良心に働きかけるようにしなさい」という方針が貫かれた。この方針が周恩来を通じて伝達されていたことを後年、高橋氏らは知るのである。

管理所にいた看守の中には、肉親を日本人兵士に殺された者もあり、このような寛容な態度を取ることに疑問を持つ者もいて「なぜ戦犯をこんなに大事にするのか」と指導者たちに文句を言い出した。周恩来はそのような疑問に対して、いずれわかるだろうと語った。

管理所での 1 年間は、まったくと言っていいほど自由だったという。彼らはトランプ、麻雀、将棋、囲碁などをして遊び惚けていた。中国側は何も言わなかった。

遊び惚けていると、彼らはそのことに飽きてきた。そうして自分の経歴や体験などを小説風を書く者が始り、部屋の中で発表するようになり、それに飽きると真面目なものを勉強しようという雰囲気が出てきた。

中国側はこのような雰囲気が出てきたところで戦犯たちに、「あなたたちは何で戦犯と呼ばれるようになったのか」「あなた達は一体何をしに中国に来たのか」と問い、「自分で考えてごらんさい」と諭すように語りかけてくるのだった。

高橋さんら戦犯たちの「人間改造」が始まったのだ。「大和民族の優越性」「八紘一宇の天皇を中心とした世界支配」なる考え方を、自ら根本から覆すようになり、「自分を見つめ直そう」という雰囲気になっていった。

多くの戦犯たちはこうして自らの罪を反省する、いわゆる〈認罪〉を行い、日本の軍国主義の片棒を担いだことを深く認識するのである。裁判を経て無罪釈放された多くの戦犯たちは日本に帰国後、「中国帰国者連盟」を創設し、日中国交回復運動に主体的に取り組んで行った。周恩来は長い戦略的な思考を持って、彼らの処遇を考えていたのである。

4) 中国人民に対する粘り強い教育

日本人への教育だけでなく、中国人民への教育がまた大変だった。ハルビン中学（日本人の中学校）に入学した年に日本の敗戦を迎えた中国研究家の武吉次朗氏は、そのまま家族とともに留用され、1958年に帰国された。その後、日本国際貿易促進協会に務めた後、大学で中国語を教え、今でも翻訳指導など中国との交流に携わって来られた方である。

その武吉さんは、2009年5月「方正の会」の総会后、『中国と私』という題で講演され、周恩来の中国人民に対する教育について次のように話された。

それは例えば日章旗の掲揚についてである。1956年に北京と上海で、1958年には武漢と広州で日本商品展覧会が開催された。国際慣例に従って会場入口に「日の丸」を掲揚したとたん、中国人民の不満と抗議が殺到した。人々は「あの旗を見ただけで、侵略され暴行されたことが思い出され、血が逆流し体が震える」「なぜ掲揚するのか」と声を挙げた。

これに対して中国側は周恩来の指導により、ポールの下に解放軍兵士を立てて旗を守るとともに、中国人民に「今来ている日本人はかつての侵略軍隊とは違い、友好増進に努めている人たちだ」と、中国と日本との友好の大切さを説明し説得に努めた。

ある中国婦人が泣き叫んで、日章旗の下で動かなかった。周恩来はそれを知ると関係者に、彼女によくわかるように詳しく話して納得させるように伝えたという。

対日賠償請求の放棄もその表れである。日中国交正常化の前夜に上海で行った調査によると、多くの庶民は「国交正常化は結構なことだが、賠償は当然取るべきだ」「賠償を取れば給料がみんな1ランク上がる」と期待していたようである。しかし中国政府は、「中国人民は、甲午戦争（日清戦争）や義和団事件（北清事変）などで巨額の賠償を取られたことで、賠償の苦しみを体験している。この苦しみを日本の次の世代に味あわせることは、世世代代の友好にとり良くない。われわれは自力更生で国づくりを進める」と説得したのである。

長年、周恩来の通訳を務めたこともある王効賢女史は、2011年8月NHKBSで放送された『証言ドキュメント 周恩来とその時代～家族と側近が語る、知られざる人間像』（以下、NHK番組という）でこう述べている。

1953年、三つの日本の団体が訪中し、中国の農村を見たいという要望があった。周恩来は農民たちを説得するよう王効賢らに指示をした。

中国農民は日本の侵略戦争で酷い目に遭っていた。まだ憎しみが癒えない時代である。そのために王たちは農民に会った。そうして説得するのである。「侵略戦争を起こしたのはごく一部の軍国主義者たちである。日本人民も同じ軍国主義者の犠牲者である。今度来る

人たちは軍国主義者ではない。中国と仲良くするために来る人たちである」。そうした工作の後、日本の訪中団を農村に案内したのである。

方正の会の前身である「方正地区支援交流の会」の事務局長を務められた牧野史敬氏は、会長であった石井貫一氏と一緒に、当時（財）日中経済協会顧問だった岡崎嘉平太氏に会った際、岡崎氏から次のような話を聞いている。

「周恩来総理は、残留孤児、残留婦人には罪は無い、彼らを生活者として人道的に手厚く処遇するように指示され」、そして岡崎氏は、今まで誰にも話さなかったことだがと前置きして、「日中正常化の際、残留婦人たちを養育した費用などについては、賠償とは別にこれだけは日本に補償を求めるべきだとの声が、特に旧満州の東北三省からあがった。しかし指導部はこの声を抑えた」という周恩来の話をされたのだった。

周恩来の教育は幹部に対してもしっかりと行われた。例えば飯白榮助^{いいじろえいすけ}氏が2010年5月の「方正の会」総会後の講演会でこんな話をされている。開拓団の一員として家族とともに旧満州に入った飯白氏が敗戦を迎えたのは興安と呼ばれたウランホト市の郊外だった。12歳の時である。父は召集され行方不明、母は間もなく亡くなり、姉は生きるために中国人の妻になり、飯白氏も残留し、3年後八路軍（解放軍、中国共産党軍）に入った。八路軍に入隊できるのは普通は17歳になってからだが、1948年のその時は国共内戦が激しく、人はいくらでも要するという状況だった。飯白氏は15歳だったが仲間と共に病院関係の仕事をすることによって八路軍に入ることができた。

中国人と仕事も生活もほとんど一緒に、特別差別されることもなかったが、やはり若い者同士、時には中国人と喧嘩をする。中国人が飯白氏に対して、日本人を馬鹿にする時に使う「小日本」「日本鬼子」と言うことがある。飯白氏もこれには腹が立ち、取っ組み合いの喧嘩になるのだ。すると必ずといっていいほど、中国共産党の幹部が出てきて仲裁するのだ。まず叱られるのは日本人をいじめた中国人の方だ。それからその幹部は飯白氏に向かって、「お前も民族意識が強すぎる。もっと国際主義の精神を持て」と叱るのである。

また幹部は、「日本鬼子というのは当時の日本の侵略者の象徴だからお前が気にすることはない」、と教えることも忘れなかったという。

国際主義的精神の教育は、このようにして幹部から庶民へと浸透していったのである。常にこまやかな心配りを忘れず行動した周恩来はまた、優れた教育者でもあった。

周恩来の溢れるような国際主義的な精神はどのようにして育ち、成長していったのか、周恩来の思想の核がどのようにして形作られていったかを次に見てみよう。

5)「長男」意識から見えてくる＜心配り＞の源

周恩来の細かい心づかいは、生い立ちをよく見ていけば領けるところが多い。

1898年3月5日、周恩来は江蘇省淮安府山陽県（現在の淮安）で生まれた。本籍は浙江省の紹興である。紹興酒で名高い紹興は、魯迅の故郷でもある。ちなみに魯迅は本名、周樹人と言い、周恩来の遠戚になるようである。

周恩来の祖父の周殿魁は財政官を務めた後、師爺という、役所の長官が私的にかかえた学識者のような務めをするために淮安に移り住んだ。その周殿魁は50歳で亡くなり、周家も没落していった。周殿魁には4人の子どもがいた。その一人、次男である貽能の長男が

周恩来である。

周恩来は祖父には生前会うことは叶わなかったが、師爺の家庭にあった独特の「慎思明弁、思之縝密、行之周全」の伝統、すなわち「慎重に考えて明解に話し、考えが緻密で、行いが周到である」という代々受け継がれてきた考え方が幼少の周恩来に影響を与えたとされている。(高橋強・川崎高志著『周恩来—人民の宰相』、以下『人民の宰相』)

とりわけ長男だった周恩来は、中国の伝統的な家庭に見られる「長男」という考えや性向が無意識の中にも深く沁みついていたと指摘する声がある。後に周恩来の詳細な評伝を書いたハン・スーイン(韓素音)はその書名を、『長兄』(ELDEST SON)と記し、周が他人のことを思いやらずにいられなかったのは、長男という要素が彼の遺伝子の中に組み込まれていたとも記している。

ハン・スーインは、日本では香港を舞台にした映画『慕情』の原作者として知られている。中国人の父とベルギー人の母との間で生まれ、1941年に重慶で初めて周恩来に会っている。それ以後周恩来には20回あまり会い、詳細な周恩来伝である『長兄—周恩来の生涯』(以下『長兄』という)を著した。

その周恩来の後年の国際主義的な精神を思う時、紹興という町についても考えざるを得ない。周一族は300年前から紹興という町に住んでいた。紹興は、運河が縦横に走り、12世紀から回教徒が住んでいるアラブ街もあるような国際的な町だった。今日の中国で言う、いわゆる少数民族も住んでいた。周恩来自身が1960年代に、「私の一族にもきっと少数民族の血が混じっているに違いない」(『長兄』)と、ハン・スーインに語っている。現実には少数民族の血が流れていようがまいが、周恩来はそう思っていた。周にとって、「純粋な人種や民族」なるものが真実、フィクションであることを肌で感じていたといえるだろう。

6) 他人の顔色を見ずには生きていけなかった幼少時

周恩来の実父である周胎能は「詩と酒を親しむ伝統的な知識分子の典型」(司馬長風著・竹内実訳『周恩来 評伝』)だった。生母である万冬児は、淮安の名門の万家であり、彼女の父、万青選は淮安府淮陽県の知事だった。母は3人の子ども、長男の恩来、次男の恩溥、三男の恩寿を生んだ。しかし母は恩来が4歳の時に亡くなった。司馬は「中国人の経験によれば、幼くして母を失った人間はきわだって従順で、しつけに手間がかからないばかりでなく、世故人情の面で早熟になるものである。というのは、この世界で自分をもっとも理解し愛してくれるのは母親であって、母親に先立たれると魂のよりどころを失い、他人の顔色をみわけながら生きていかなければならないからである」と、幼い周恩来に及ぼした影響を記している。

生母の死後、父親は後妻を迎え、恩来は叔父の周貽淦の養子になった。伯父の妻が養母・陳氏である。当時の女性には名前はなく、陳氏の子どもという意味で陳氏というより他に表現しようもない。この「養母は終日家を守り外出せず、私の静かな性格は彼女から受け継いだものだ。しかし私の実の母は、爽快で明るい人だったので、私の性格も彼女の一部分である」と後年、周は語っている。(『人民の宰相』)

叔父には子供がなく、叔父を慰めるために周恩来は養子になった。しかし間もなく叔父は亡くなり、恩来は養母の陳氏に育てられた。

養母の父親は清朝の秀才で医術も学んでいた貧しい読書人、いわばインテリである。そのような家庭環境の中で養母は教育を受け、幼少の頃から詩文や書画を好み、広い学識と文学的な素養もあった。いわゆる伝統的な才女とも言うべき女性で性格も温和、誠実で細かいところにも気がつき、やさしく思いやりがあったという。こう書いていくとまるで周恩来にそっくりである。周恩来は自ら言うように、この養母の性格を受け継いだとも言えそうだ。養母も若くして夫を亡くしたため、周恩来に対して持てる愛情のすべてを注いだという。

周恩来はそのような養母の下、字を習い唐詩を覚え始めた。『大学』『論語』『孟子』『中庸』『詩経』など、いわば中華民族の伝統文化を幼少時から学んでいたのである。周恩来の「熟慮し、人を気遣い、心配りを怠らない」といった性格や個性は、このような家庭環境の中で生み出されてきたといえるだろう。

7) 新たな人生の転機をもたらした東北地方

人は家を出ることによって成長する。周恩来が9歳の頃、父は湖北に働きに出ていた。1年後、養母は結核を患い亡くなった。二人の母を亡くした周恩来は弟とともに淮安の本家に戻り住んだ。

父と父の兄である貽賡は外地で働いていたが収入は少なく、周恩来がまだ10歳になるかならないかというのに、封建的家父長制の家の中で、養母と弟二人の家族を守り養う長男としての責務を担うことになった。

1910年、周恩来が12歳の折り、父の兄である貽賡は、遼寧省瀋陽の財政局で昇任が決まり生活が安定した。貽賡には子どもがいなかったこともあり、聡明で勉強好きの甥、恩来をかわいがり、また同情もして周恩来を呼び寄せた。

1910年の春、周恩来はまず遼寧省鉄嶺の銀崗書院で学び、その後、瀋陽に開設されたばかりの奉天東関模範学校に入学した。家を離れ東北に行ったことは周恩来にとって、生活や思想を大きく変える鍵となったようである。「あの時、家を離れるということがなければ、私の一生の成功はなかったし、家に残った弟たちと同じように、悲劇で終わったであろう」と周恩来は語っている。(『人民の宰相』)

その年の秋、東関模範学校は、理路整然とした思考能力を身につけさせるために弁論大会を開いた。周恩来も参加した。彼のテーマは阿片禁止論だった。「この毒薬が禁止されない限り、どうしてわが国が繁栄し、国民が強くなることができるでしょう？」(『人民の宰相』)

後年、数々の国際会議で演説した周恩来の弁舌は各国の参加者を魅了したが、これは人々の前で話す周恩来の最初の演説ともいえるべきものだった。

(次号に続く)

本会事務局参与

木村直美さんのご逝去を悼む

牧野 史敬

本会の前身である「方正地区支援交流の会」は、1993年6月、会長 石井貫一氏（自由民主党政務調査会総括調査役）の呼び掛けにより、(財)日中友好会館で発足した。

木村直美さんは、自民党政調会専門委員として石井氏の下でお仕事をされてきた関係もあって、退職後は理事として石井会長の下でこの会の活動を支え推進して下さった方でした。

方正地区支援交流の会は、副タイトル「ハルビン市方正地区住民福祉の向上と産業発展のための支援交流を行う会」として発足しました。この会の事業を要約すると――

1. 方正地区に日本政府からの開発援助ODAを、旧来のカテゴリーから“民間主導”による“新機軸”をもって実施しようとするものでした。

このプロジェクトの実務的補佐役として、石井氏が仲人された国際協力事業団奉職歴30余年の故・関洋一氏を起用されました。これは1997年から3ヶ年間、「ミニプロジェクト」技術協力として実施されました。

2. さらにこのODAは、基幹的技術協力であり、民間による“補完的事业”に各省のもつ“公的支援”とを結びつける、実務的補佐役として木村直美さんがあたられました。

こうした中で、補完事業の公的支援にあたられた、いくつかの事例をご紹介します。

1. 私立方正県日本語学校に対して

この学校は、1992年11月、来日された方正県副県長（対日連絡担当）王鳳山氏により、ハルビン市・黒竜江省教育局の認可を得て、「私立」として開校されたものです。開校時には、日本から有志による資金カンパがありました。

1995年、日本敗戦50年の記念の年、学校運営充実のため、大型テレビ、日本の詩歌のビデオ、図書、教具保管庫等々の寄贈を、外務省所管の“草の根無償資金”による公的支援として瀋陽領事館を通じて実施されたこと。

2. 山形県大石田町（方正県と友好協定を締結していた）“西瓜栽培技術者”の受入れには、(財)海外技術者研修機構（JITTCO）の制度活用を推進されたこと。

3. 長野県中野市の故・掛川庸夫氏（畜産専門家）による“発酵肥料”の製法によるハルビン市郊外の阿城市でのテスト飼育（増体量・肉質）の好成績があり、この製法技術を普及させるには、自費或いは資金カンパには限度があることから、(財)日本シルバー

ボランティアーズ（JSV）の活用など、方途を開いて下さいました。こうして掛川氏は何回も訪中されました。この製法は、黒竜江省科学技術委員会の採用するところとなり、“神農素”^{じんのうそ}として中国専利局（特許局）の製法特許を得て、技術移転に発展することとなりました。

この間、木村さんから、“中国のことをしっかりとした人” から勉強したいということのを伺い、東京都教職員組合有志による勉強会が金丸千尋先生（元財日中科学技術文化センター理事）により開催されましたが、毎回参加されていたということのを伺いました。

また、財日中友好会館主催の日中問題の勉強会、後藤田正晴先生の「日本・米国・中国のあり方を探る」、元中国大使 中江要介先生の「日本と中国、共同声明の再認識」等には、金丸千尋先生と共に参加されました。

こうした内実を深めて、石井会長のもつ“日中に翔ける想い”を高められてゆく方でした。

毎年、岡山県の実家に帰省し、菩提寺で法要を営まれることを恒例とされており、本誌「星火方正」をお配りしておられ、2009 年、住職の竹井成範さんは“方正日本人公墓”の存在に驚き、本山である高野山真言宗の宗議会議員でもあることから提案をされて、2011 年 6 月には、大僧正ほか 12 名の僧侶による理趣経での慰霊法要の具現化の原動力となりました。

1998 年、石井貫一氏には、民間の技術協力・支援の功績に対して中華人民共和国の“友誼奨”の受賞がありました。これを記念して「日本と中国の底辺を翔ける 70 年」（A4 版 180 頁）の発行にあたって企画・編集に参画され、受賞と併せて記念誌発行の祝賀会を自民党本部大会議室での執行には、まことに目配りのきいたご発言などがあり盛大に実施することができました。2005 年、石井氏のご他界になられますと、喪主愛輝夫人に付き添われてご葬儀を挙行され、引き続き自民党本部での“偲ぶ会”にも、実行委員として、故人を知る友人諸氏を来賓としてお招きし盛会を得ました。

ここ 1、2 年、体調不良と伝えられておりましたが、2014 年 6 月の本会の総会には、久々にご息女とお顔をお出し下さいましたことが、最後のお別れになろうとは夢にも思いやらないことでした。

会の発展のために熱意あるお力添えの数々を心に刻んで、ご冥福をお祈り申し上げます。

通夜・告別式には私を含めて当会からは、奥村正雄、大類善啓、森一彦、今村静江氏らが参列し、故人の当会への長年にわたる尽力に感謝し、ご冥福をお祈りさせていただきました。

（まきの・ふみたか：当会事務局参与）



写真（上）は 2008 年 3 月、方正テレビ局が事務局を訪問、取材を受ける木村直美さん。左端が女性ディレクターの張曉丹さん、木村さんの右が残留婦人の二世である方正出身の武田正志さん。



2008 年 7 月、初めて木村さんは方正を訪ねた。方正県政府前で。後列の真ん中が木村さん

方正日本人公墓への思い

木村直美（理事）

私が初めてハルビン市方正県にある日本人公墓と中国養父母公墓の存在を知ったのは、「ハルビン市方正地区支援交流の会」の会長・故石井貫一氏のお手伝いを始めた平成6、7年のことである。

日本に痛めつけられた中国の人々が、当時決して豊かでない中で日本人の孤児を養い、5千人ほどの死者の遺骨を集め、墓を作り今もその整備管理を行っているという。それを聞いて、我々日本人が同じ状況下におかれた時に果たして同様の行動が出来るだろうか、という思いを深くしたことだった。

それから10数年、今回「友好の原点を歩く」訪中団に参加し、旧満洲時代に日本の残した負の遺産ともいえるべき史跡を視察した。

この旅で思ったのは、人間は集団になって、ある方向性を与えられると、平和な世界であっては考えられないような残虐な行為も平気で出来るということである。

狂ったような集団の状況下、個人の感情はどのようなになってしまったのか。集団のもつ怖さと虐げられた人びとの対応の多様さ、特に撫順戦犯管理所における戦犯に対する寛大な措置、そしてこれらの施設を案内する日本語の堪能な中国人ガイドの心の内はいかばかりかと思う。

このような事実を胸に刻み、方正の日本人公墓に関わっていきたいと思う。



撫順戦犯管理所前で記念写真を撮る

公益社団法人日中友好協会発行

「日本と中国」2015年5月1日号

6月7日に「方正友好交流の会」総会

岡崎温理理事長が新中国での体験を語る

黒竜江省ハルビン市方正県にある日本人公墓の存在を通じて、国境を越えた国際的な友愛精神を広めよう活動している方正友好交流の会は、6月7日（日）午後2時からJR御茶ノ水駅そばの中央大学駿河台記念館610号室（☎03-3292-3111）で総会と映画上映会などを開く。

午後2時半からは、当協会の岡崎温理理事長がインタビューに答える形で、新中国に生れ育ち、厳しい文化大革命を経て日本に帰国するまでの貴重な体験を語ることになっている。その後は、残留孤児・徐士蘭さんの来日の日々を描いた映画『10日間だけの祖国』の完成試写会を午後3時40分ごろから上映する。会員以外でも参加が可能。問い合わせ先は、同会事務局の大類（おおるい）☎03-3295-0411または090-2768-13338まで。

日中文化交流協会 2015年1月1日

発行の会報「日中文化交流」

本・評と紹介

ある華僑の戦後日中関係史

日中交流のはざまに生きた韓慶愈

大類善啓 著

88歳の今も日中科学技術文化センター顧問や東京華僑総会常務理事などとして活躍する韓慶愈氏。「満洲国」の公費留学生として来日した氏が、戦後帰国を決意するも廖承志氏の一言で日本残留を決め、華僑向け中国語新聞の発行、中国代表団の通訳、中国に日本企業の技術や情報を提供する会社を起業したことなど、紆余曲折の人生を著者が聞き書きして纏めた。これまでに日華僑の人々は自身を語ることが少なく、その意味で華僑の戦後史、知られざる日中交流史として本書刊行の意義は大きい。作家の巴金氏や俳優の趙丹氏と文革後に再会を果たした逸話も収める。日中関係が厳しい今こそ、本書を通じて友好の実を積み上げてきた先達の努力を思い起こしたい。《Z》

（明石書店 252ページ 本体2,300円）

～川田龍平さんが国会で方正公墓について質問～

寺沢秀文

＜解説：国会で参議院議員の川田龍平さんが方正公墓について質問するという旨、川田事務所から電話が入ったのはその前夜だった。すぐに会の仲間たちに連絡した。当日、テレビ中継はなかったが、インターネットでの中継があるというので見た。さっそく、精力的に＜満蒙開拓つれづれ草＞を発信している寺沢さんが、これを取り上げてくれたので転載する。なお議事録は方正関係と関連する部分だけを紹介した。（大類）＞

.....
お早うございます。もう4月、新年度が始まっています。今朝の飯田は雨降り。市内大宮通りの桜も7～8分咲きですが、ちょっと残念な雨です。

桜のお話は末尾とすることとし、早速今日のテーマですが、参議院議員の川田龍平さんが去る3月31日の国会・参議院の厚生労働委員会で「方正日本人公墓」（この「つれづれ草」でも何回も触れていますが旧満州で公式に建立が許された唯一の日本人公墓です）について質問されました。

この日の午前中、方正日本人公墓を支援する市民団体「方正友好交流の会」（事務局・東京）の大類善啓事務局長より電話が入り、「今日の参議院の国会質問で川田龍平さんが方正公墓について質問されるそうです」という第一報を頂きました。

川田議員の国会質問は午前11時過ぎからでインターネットでも見られるとのことでしたが、生憎、年度末最後の日で官公庁等を飛び回らなくてはならなかったため、残念ながら見られなかったものの、昨日、その国会質問の議事録を未定稿ながら、大類事務局長が送って下さいました。

その議事録（未定稿）を別添します（但し、あくまで未定稿です）。詳しくはそれをお読み頂きたいと思いますが、川田議員は、戦後70年に際し、先の大戦における戦没者の慰霊、遺骨収集等について触れる中で、この方正公墓についても触れています。

川田議員は答弁に立った塩崎恭久厚生労働大臣に対し、「黒竜江省ハルビン郊外の方正県には、中国で唯一の日本人公墓というものがあります。国交回復前の1963年、中国政府が建立したもので、満州開拓の民間人を中心に5千人くらいの方の埋葬がされているそうです。2010年11月には丹羽大使が献花をされています。この方正日本人公墓の存在を塩崎大臣は御存じでしたでしょうか。他国の政府が我が国の一般民間人戦災者のためにもこうしてお墓を建立し、維持管理してくれている事実について、個人としてどのような感想をお持ちでしょうか」と質問されています。

これに対して塩崎大臣は、「中国での遺骨収集帰還というのは中国国内の国民感情などを理由にできないということになっておりまして、今、（川田）先生から御指摘がございました日本人公墓、これにつきましては、事務方から聞いてそのような公墓があることを私も初めて知ったところでございます。中国政府で維持管理をされているということであれば、そのこと自体は大変有り難いというふうに考えているところでございます」と答えています。

今さらでもありませんが、大臣答弁において、旧満州で唯一と言うよりも中国国内では唯一の日本人公墓である「方正日本人公墓」について、担当大臣が「その存在を初めて知った」と答弁していることに大変残念というよりは、正直、腹立たしいものすら感じます。

方正日本人公墓には多くの日本人、それも多分、多くは満蒙開拓団員と思われる犠牲者等が葬られています。国策として、日本国内からの「人減らし」と、満州の国防の一端を開拓団にも担わせるという「人間の盾」として、「開拓」という名前で旧満州に送り込んでおきながら、ソ連軍侵攻時には戦略上の理由からと関東軍は開拓団の大半が住む地域を「放棄地域」として見捨てて南下し、そして戦後は「日本国籍を捨ててもいいから現地に留まって生き延びよ」という方針を下している。国策としての「開拓」という名での「移民」が、また国策により「棄民」とされているわけであり、結果として国が国民を見捨てた。その犠牲者たちを祀る公墓が現地政府の費用により維持されているということ、その公墓の存在自体を担当大臣が知らないということに悲しいものを感じます。

勿論、厚生労働省自体としては把握しているも、たまたま担当大臣の塩崎大臣がそれまで知らなかったということであり、それを塩崎大臣は正直に「初めて知った」と答えてくれたのでしょうが、しかし、厚生労働大臣まで務める方、ベテラン議員がそのことをずっと知らないでいたということ自体が問題だと思います。政権与党である自民党の議員を始め国会議員のうちの多くの方がこの方正公墓の存在自体を知らないのではないのでしょうか。それが、方正公墓だけでなく、旧満州、あるいは満蒙開拓等についての国会議員、そして日本国民全体における認識の程度なのだろうと思います。

勿論、日中間における戦争認識の差異、国民感情等もあって、簡単には日本の国会議員や政府高官等が方正公墓を墓参等することは出来ないのだろうと思いますが、しかし、墓参までは出来ないものの、そういった唯一の公墓が方正にあるということぐらいは、せめて国会議員の皆さんには知っていただきたいものと願わずにはおられません。（過去、宮本雄二大使が2008年に、また丹羽宇一郎大使が2012年に、計2人の中国大使が訪問されていることはあるものの、現役の国会議員、政府高官等が公式に訪問したことはありません）

この方正公墓のことが国会質問で取り上げられたのはたぶんは初めてか、あるいはここしばらくの間では無かったことだろうと思います。とは言え、以前の民主党政権下の時代に

は、中国側からの要請もあり、２００９年（平成２１年）年から３年間ほどの間、確か年額４０万円であったと思いますが、日本政府から中国側に支払っていたことがありました。

しかし、それもその後、２０１２年（平成２４年）に、かの方正公墓赤ペンキ事件による波紋等の中で、中国側から「日本からの支援は受けない」として受け取り拒否され、そのままもう支出されなくなってしまう（別添の信濃毎日新聞記事参照）。その時の経過等は国会では取り上げられたことが無かったのか、ちょっと気になるところです。

それにしても、国会質問でこの方正公墓のことを取り上げてくれた川田龍平議員には「良く取り上げてくれました」と心からお礼を申し上げたいと思います。

言うまでもなく川田議員は東京ＨＩＶ訴訟の原告ともなった方であり、そのようなことから人権問題や平和問題等についても沢山の活動をされている方です。実は、この薬害エイズ裁判に関しては、旧満州とも関わりが出てきます。

薬害エイズ裁判の中で出てきたあの「ミドリ十字」という製薬会社、実はこの会社は、かつて旧満州で細菌実験、人体実験等を行った７３１部隊（石井部隊）に所属していた科学者、医者等が、戦後、アメリカへのその実験データ等を渡すのと引き替えに免責されて戦犯から逃れ、その人々らが中心となって作ったのがこの「ミドリ十字」と言われています。

戦犯から逃れた７３１部隊の関係者等により、１９５０年当時の朝鮮戦争の時に「日本ブラッドバンク」という民間血液銀行のような会社が作られ、それが「ミドリ十字」と変わり、その後、合併等を繰り返して、「三菱ウェルファーマ」、そして今は「田辺三菱製薬」に吸収されています。薬害エイズ問題を手繰っていくと、旧満州で悪名を馳せた７３１部隊の名前が出てきて、その旧満州での唯一の日本人公墓のことを薬害エイズ裁判を闘った川田議員が取り上げてくれたということに何か因縁すら感じます。

また、薬害エイズ裁判の中で「バイエル薬品」という外資系の製薬会社の名前が出てきますが、実はこの会社、ドイツの化学薬品メーカーで、あのナチスドイツにおいて毒ガスを作っていた企業の小会社だったという話もあります。

戦争は終わっても、それから派生したことは今もまだ終わっていない。過去のことに向けることは今の平和と命の安全を大切にするためにも必要なのだということを改めて感じます。

なお、この唯一の日本人公墓「方正公墓」を支援する国内唯一の民間団体「方正友好交流の会」、皆さんにも是非ご入会頂きたいと思います。連絡先は以下の通りです。６月７日には東京都内で今年の総会も開催されることになっています。

189-参-厚生労働委員会-004 号 2015 年 03 月 31 日(未定稿)

○川田龍平君 維新の党の川田龍平です。

まず、さきの大戦により命を奪われた方々、そして戦没者の遺族の方々に弔慰の意を表させていただきます。

さきの大戦で被害に遭われた方は軍人軍属に限りません。東京大空襲などで銃後の守りに付いていた多くの一般民間人が命を落とされ、残された家族は大変な御苦勞をされてきました。空襲被害については援護法制定を求める超党派の議連が二〇一一年六月に設立されていますが、政府は裁判で解決済みとの姿勢を崩していません。

他方、黒竜江省ハルビン郊外の方正県には、中国で唯一の日本人公墓というものがあります。国交回復前の一九六三年、中国政府が建立したもので、満州開拓の民間人を中心に五千人くらいの方の埋葬がされているそうです。二〇一〇年十一月には丹羽大使が献花をされています。

この方正日本人公墓の存在を塩崎大臣は御存じでしたでしょうか。他国の政府が我が国の一般民間人戦災者のためにもこうしてお墓を建立し、維持管理してくれている事実について、個人としてどのような感想をお持ちでしょうか。

○国務大臣（塩崎恭久君） 中国での遺骨収集帰還というのは中国国内の国民感情などを理由にできないということになっておりまして、今先生から御指摘がございました日本人公墓、これにつきましては、事務方から聞いてそのような公墓があることを私も初めて知ったところでございます。中国政府で維持管理をされているということであれば、そのこと自体は大変有り難いというふうに考えているところでございます。

○川田龍平君 この中国以外、ロシア、モンゴル、アジア太平洋などでかつて戦地に厚生省が建立をした戦没者慰霊碑は、軍人軍属だけではなく現地の人も含め、一般民間人死亡者も対象となっているとのこと。御遺族に対する支援について軍と民間とで大きな差が出ている状況を塩崎大臣はどのように思われますでしょうか。

○国務大臣（塩崎恭久君） 厚生労働省が所管をしておりますこの戦傷病者戦没者遺族等援護法は、対象は、国と雇用関係にあった軍人軍属や雇用類似の関係にあった準軍属、そして公務等による傷病により障害の状態になり又は死亡された場合、それから国が国家補償の精神に基づいて使用者の立場から補償を行うというものがこの法律の対象となっているわけございまして、このため、国家が強制的に戦地における戦闘行為や軍需工場における就労等に参加をさせたという事情のない一般戦災者については、この法律の対象とはしていないところでございます。

御質問の一般戦災者に対する補償は、厚生労働省の所管ではなく、直接コメントする立場にはございまして、この点については答弁は差し控えさせていただければというふうに思います。

○川田龍平君 これは通告しておりませんが、海外で受難した民間人は慰霊をするのに、国内で戦争に巻き込まれた民間人、空襲被害は厚労省の担当ではないとする立場は、これは、大臣、矛盾しないでしょうか。

○国務大臣（塩崎恭久君） 先ほどお話が出たように、この法律は、国会で議論の末に作られ、そしてこの対象となる方々は、今申し上げたようなことで対象が定められたわけでございます。

そういう中でこの補償が行われているわけでありまして、今お話の一般の戦災者、このこと自体は大変我々にとってはつらい悲しいことであるわけでございますけれども、それとこの法律の対象とすべき範囲が違うということについては、これは今後やはり、もし考えるということであるならば、国会で御議論を賜って、法律で定めた上でどうするかということを決めなければいけないというふうに思います。

○川田龍平君 これは日本政府として、やはりこういった、海外では、戦災に遭われた方たち、現地の人も含めて、民間人も含めてこういった碑を建てているわけですが、国内においてはそれができていないということなんです。

そういったことをやっぱりしっかり考えていただいて、戦後八十年に向けて、この戦後という言葉ですけれども、もはや戦後ではないのではないかという思いも、私も危機感を感じております。日本が戦後という言葉で、この八十年後ということになるのかどうかも含めて、一日も早く、遺族の方も亡くなっていくわけですし、一日も早く遺族の方への弔慰を表すということが私は必要ではないかと思っています。この一般民間人の戦災者の御遺族に対する支援や弔慰の意を何らかの形で表すことも厚労省としては是非検討していただきたいと思います。

次に、遺骨収集についての質問に移ります。

海外戦没者二百四十万人のうち百十三万柱の御遺骨が御帰国されていません。うち二十三万柱は、中国や北朝鮮、ウズベキスタンなど、相手国の事情により収容困難とされていますが、ほかにも治安が悪く収集が進んでいない激戦地があります。

その一つがミャンマー、旧ビルマ奥地の少数民族が割拠している地域、紛争地域において二〇一二年から地道に遺骨調査を続けている民間人の方がいらっしゃいます。井本勝幸さんという方ですが、本日付けで、チェンマイ総領事館及びヤンゴンの日本大使館にこの二年半の活動を、成果を報告書にまとめ提出されると聞いております。私もその報告書案を拝見させていただきましたが、百柱以上もの御遺骨の存在を写真やGPS情報、地元住民の証言などを交えて報告いただいています。

この情報が風化する前に、一刻も早く政府調査団を派遣し、これまでできなかったミャンマー奥地での遺骨収集を進めるべきと考えますが、いかがでしょうか。また、その際は井本さんにも同行を求め、井本さんのネットワークを最大に生かすべきではないかと考えますが、いかがでしょうか。

再び山口淑子について

―クウェート人質事件で見せた、知られざる活躍など―

大類 善啓

山口淑子が亡くなって1年半、相変わらず彼女というより＜李香蘭＞の人気の高い。

李香蘭が戦前に録音した2曲の未発表音源が見つかったという記事が朝日新聞夕刊（2015年4月11日付）一面に大きく掲載されていた。李香蘭は今でも人々を引きつける何かを持っているようだ。かくいう私も、やや複雑な気持ちがありながらも、新聞記事を見つけると切り抜いてスクラップブックに張り付けている。いずれ何か書く時の参考にしようと思っているからだ、深層心理的にはやはり引きつけられているのだろう。

さて、前号（『星火方正』19号、2014年12月刊）に、そんな山口淑子とのささやかなエピソードを記した。方正友好交流の会発足当初には、こんな逸話というか歴史もあったのだ、と書いておきたかったからである。

山口淑子に、ややいじわるだったか？ 拙文

実は、その原稿を書いている最中も、山口淑子が私との電話で、「あの時、関東軍は逃げてしまったんですね」という言葉を何度もつぶやくように言うだけで会話が成立せず、彼女は呆けたのではないかと思った。事実、仲間の木村直美（彼女も昨2014年、亡くなった）さんは、自民党の政務調査会に勤めていたこともあり、国会議員として山口淑子を知っている人だが、彼女も「呆けたかもしれないわね」と私に語った。

私は木村さんの名前を伏せて書いた後、原稿を連れ合いに見せ感想を聞いたところ、この「呆けた云々は・・・」は人格に触れることでもあり、削除した方がいいのではないかと言うのでその部分はカットした。しかし事実は、後に記す藤原作弥（『李香蘭の半生』で山口淑子との共著者）さんが電話で私に語ったように、亡くなる数年前は当然とはいえ高齢故に正確な判断力を欠いていたようである。

また拙文には、面識あるAさんの、山口淑子との不愉快だった逸話を書いたが、正直言えば、これも書くべきかどうか迷ったのだが、美辞麗句や美談で終わらせたくないという気持ちもあり、山口淑子の知られざる一面をこの際書いておくのもいいかと思い記した。

と言うのも、他にも山口についてあまり芳しくないことを言う人を知っていたからであり、また私自身もかつて週刊誌の記者時代に甘粕正彦に関する取材をしたことがあり、その折り、甘粕正彦氏と親しく、『私と満州国』という著書もあり、明治学院大学の学長を務めた武藤富男さんから直接、彼女に関するゴシップの類を聞いていたのだが、さすがそれは書く気はしなかった。

会報19号を発行した後、「脳トレのつもりで書いているので気にしないでください」と言って、いつも添削のように小生の文章に朱を入れて感想を手紙で送ってくれる友人のSさんは、拙文に関して、最後の部分は本筋ではないから、書かなくても良かったのではな

いか、と記してきた。そういう感想もあるだろうなと予想はしていた。私自身も、ちょっと山口淑子に意地の悪いような気持ちもあったようで気になってはいた。

似たような満州>と李香蘭の存在

そんなこともあり、本稿を書くに当たっては、友人にも改めて拙文の感想も聞いてみた。満蒙開拓平和記念館専務理事の寺沢秀文さんは、こんなメールをくれた。

＜前号の大類さんの書かれたもの、昨夜、改めて読み直しました。李香蘭、そして山口淑子として歴史上でも特異な存在であったのだと改めて思うと共に、いろいろな顔を持っていた人なんだと改めて思います。人には誰にもいろんな面があって、ステレオタイプの山口淑子、李香蘭があるわけではなくて、いろいろな面、受け止め方があったのだということが、大類さんの書かれたものを読んで改めてそう思いました。

山口淑子さんの人生は波乱に富んだものであり、かつての李香蘭としての体験の反省から、戦後の平和活動等に結びついていったことは、やはりそれなりに評価されることであると思います。しかし、大類さんの文中でも指摘される通り、李香蘭という存在自体は中国側からを含めて、見る立場によって大きく評価が変わると思います。

それはやはり、指摘されている通り、李香蘭の存在は満州国の存在自体とも似通っていると思います。旧満州国が中国では「偽満」とされ、また満蒙開拓団が「侵略移民団」と受け止められているように、李香蘭はやはり満州国における日本による現地への抑圧政策等の象徴でもあったのだらうと思います。現地対策に利用された李香蘭という存在と、人間の盾として国策として満州に送り込まれた開拓団とはどこかで共通するものを感じます。勿論、自分の意思もあったらうとは言え、それを越えたところで時代に翻弄され、結果として現地の人々に苦痛や不快を与える結果となったということはどちらも共通点を感じます。勿論、だからと言って、その存在が許される等のことではありませんが・・・。

満蒙開拓や旧満州に対する総括と反省が必要なように、李香蘭という存在自体もやはりその存在に対する総括なりが必要であり、そのことをご本人である山口淑子さんがどのように受け止めていたかは私にも判りかねます。

今日、日本国内では満州という存在が一部の人々にとってはある意味、幻想的、魅力的に映る捉え方も少なくないようです。李香蘭という存在もまた似たようなところがあると思います。そう捉えることもまた一つの捉え方かと思いますが、それを否定、肯定するに関わらず、満州にしても、李香蘭にしても、その存在が中国の人々にとっては忌避する存在なの다는ことは絶えず認識していなくてはならないと思います＞

彼女は何者だったのか？

日本人公墓を方正県人民政府に嘆願した残留婦人、松田ちよさんの人生を描いた『天を恨み、地を呪いました』の著者でもある奥村正雄さんはこんなメールをくれた。

＜貴兄の「山口淑子のこと」はとても良い記事だと思った。そのポイントは王蒙の「山口淑子はいいい、が李香蘭は、徹底的に葬りさなければならない」に尽きる。しかし彼女

はその李香蘭から終生、抜け出せなかった。抜け出す、あるいは抜け出そうという意識があれば、「李香蘭」風靡の時代に翻弄されて多く婦女子が死んでいった歴史を踏まえた「方正友好交流の会」に、たとえば1億円カンパしてもおかしくはない。彼女から接触があったと聞いた時に私にはその期待があった。が、それっきりという事実、「なんだ、こいつは！」と思ったことを覚えている。わが家の近くに建つ豪華な老人ホームにも彼女が「理事長」として宣伝に使われていた。そこでも裏で流れた金は、彼女のポケットに入っただけである。と、まあ、これが感想です>

そうして翌日、<山口淑子について、いろいろな人が彼女の人間としての様々な面を語るの、それなりに面白い。が、私には、つまるところ彼女はナニモノだったか、にしか最終的に興味がない>というメールが来た。

川合継美（旧姓、梨本、著書に『同舟 欧陽可亮伝』があり、父親が『中国のなかの日本人』の著者、梨本祐平の息女）さんは手紙で、<山口さんは中国を思い続けながら、服装は出来るだけ、大和撫子らしくしたいとも思っていたらっしゃいました。（山口さんの存在を）歴史的に究明するという点では必要かもしれませんが、私個人としては、今はもうそっとしておいてあげたいです。自己陶醉もあったでしょう。山口さんもナルシストそのものでもあったでしょう。自責の念に駆られることで自分の存在を感じた。確かに気まぐれな方だろうとは思いますが、あの方のよって来たる宿命を考えればあり得るように思われます>と書いてくれた。



写真：川合継美さん（左）と山口淑子

改めて電話で話を聞くと、20 年ほど前、日中関係のある会合で山口淑子を紹介され、お互いに北京育ちということもあったようで、話が弾んだとのこと。その仲よく話した様子を見て、川合さんの夫も会場にいた新聞記者たちも、少しばかり距離をおいて遠巻きにするほどだったそうだ。

川合さんは、テレビ番組『徹子の部屋』に登場した山口が、「もう戦争は本当に嫌です」と語って号泣した場面があったと話してくれた。

武吉次朗さん、羽田澄子さん、「彼女の反省は本物だ」

山口淑子について、とりわけ満映時代での映画活動についての反省は本物なのか、ということを確かめたく、何人かにも聞いてみた。

敗戦後も父上の留用に従ってハルピンに残り、1958 年に帰国された武吉次朗さんは、当然とはいえ中国事情に詳しく、また中国分析などを含めて私が信頼する一人である。その武吉さんに山口淑子について尋ねると、「山口淑子の反省の言葉は信頼できると私は思っています」とのことだった。

長年、日中貿易関係の団体に勤務されていた武吉さんは、会合では何度も山口に会ってはいるが直接、言葉は交わしたことはないというが、信頼する武吉さんの言葉である。彼女の戦後の言動などをしっかりと見て、そう判断されたのだろう。

また、大連生まれ旅順育ちの映画作家・羽田澄子さんも同様に、彼女の反省は「信じていい」という意見だった。

そんなこともあり、前号拙文の＜やや意地の悪い書き方＞を、少し咎める気持ちもあり、山口淑子の名誉を回復！？ したいと思っていたところ、ヨガ仲間である長谷川悠紀子さんの山口淑子とのエピソードを思い出し、改めて悠紀子さんに話を聞いてみた。

クウェートで人質になった長谷川悠紀子さんの証言

長谷川捷一・悠紀子さんご夫妻とは、10 数年以上になるヨガ仲間である。捷一さんはアラビア石油に勤務され、夫人の悠紀子さんとともにサウディ・アラビアのカフジ原油生産基地に 14 年近く技術者として滞在されていた。その長谷川さん夫妻が長いサウディ駐在を終えて、クウェート事務所に技術調整役として移られて 2 年ほど経った 1990 年 8 月 2 日、突如、イラクのフセイン政権はクウェートに侵攻した。

長谷川夫妻は多くの日本人や欧米人とともに虜囚の身になった。当時のイギリス首相・サッチャー女史は、「女・子どもまで人質にするとは何事か！」と批判した。フセインは一応、人質になった人たちを「ゲストピープル」と表現し、お客さまのように言うが、実体は「人間の盾」だった。

このサッチャーの言葉が効いたのかフセインは、女性と子どもたちを解放し、悠紀子さんも夫より早く日本に帰国することができた。悠紀子さんが素晴らしいのはここからの活動である。

悠紀子さんは、夫たちの早期解放を願って、一足早く解放された夫人たちをまとめて「あ

やめ会」(クウェート時代の夫人会の名前を使ったという)を組織し会長になり、国会議員らに積極的に働きかけた。

「会を組織したのは、夫たちや単身で駐在していた息子たちを日本でジッと待っている留守家族の不安を少しでも和らげようと思ったからです。日本のマスコミはオーバーに人質生活の悲惨さばかり書きすぎるから、留守家族たちが不安になったのです。だから私たち第一陣が陽気に帰ってきたことで、ずいぶん気が楽になったとよく言われました。人質のくせに明るすぎると文句を言う人もいたけど(笑)」

帰国から一夜明け、「人質生活」について話すアラビヤ石油クウェート事務所長の長谷川悠紀子さん。午前8時45分、東京都文京区大塚六丁目の自宅。



好意 次第に消え

「支援策」

クウェートがイラク軍に攻められ、日本人の女性や子どもが二日夜、帰国して自宅に戻ったアラビヤ石油クウェート事務高梨司さん(右)の妻恵子さん(左)は世田谷区上野賀子自、同生活からバックアップへの移動、ホテルでの献祭のあと、長谷川、そして、突然の女性と子どもだけの帰国。普通の日本人の

イラク脱出の2女性談

長谷川さんは昨年一月、すでに告があり、大使館の地下室へ移るに赴任していた夫を追ってクウェートに行った。住まは米大使館に近いマンションだった。8月2日、午前五時半ごろ、「ドカーン」という音を目覚まし、外を見る、クウェートタワーが砲撃され、煙が上っていた。危険を感じ、郊外にあるアラビヤ石油所長の高梨さん宅に避難した。6・22日、日本大使館から動

長谷川悠紀子さんの活躍ぶりを伝える当時の新聞

クウェート残留日本婦人への山口淑子の対応

悠紀子さんは議員会館に出向き、次々にアポイントを取って国会議員に会い、早期解放を訴えた。今は亡き新井将敬や鯨岡兵輔などは誠実に対応してくれた。山口淑子にも電話をすると「すぐいらしてください」と言われた。悠紀子さんはユーモアのセンスも豊かで、日本の風土のような湿ったようなところがなく、いい意味で日本人離れしている。

悠紀子さんが山口淑子と話をしていたら、山口から「長谷川さんは弁も立つし議員に立候補されたら」と言われる。すると口に出たのが、「先生といわれるほど馬鹿じゃなし」なんて言ってしまうのだ。

そんな会話をするようになって山口淑子と親しくなった悠紀子さんに、フセイン政権のクウェート人と結婚していた日本女性たちと子どもたちは<日本に帰れ>という言葉が耳に入った。20人ほどいた残留婦人たちは、危険な状態でなかなか帰れないという。彼女た

ちの夫は日本企業に属していない。カナダ大使館は BOAC を飛ばそうと言ってくれたが一方、英国の日本大使館は「帰国費用は貸すから帰国するまでに返してください」と、思いやりのないことを言う。

結果的に 20 人の日本婦人とクウェート人との間に生まれた子供たちは、JAL と ANA に分乗して日本に帰ってきた。しかし彼女たちに 200 万円ほどの飛行機代の請求がきたのだ。その中の一人が「姉の家に身を寄せているのですが、どうしたものでしょうか」と、悠紀子さんに電話で相談してきた。

悠紀子さんはすぐに、山口淑子に相談してみようと電話をした。山口に会えば、「お金はお支払いにならないで。私がなんとかしますから。でも私がやったとはおっしゃらないでね」と言うのだった。

ともあれ、とにかく払わないで済んだのである。「外務省とか JAL に掛け合ってくださいましたのか、ポケットマネーで払ってくださったのか、どこが払ったのかまでは私は聞かずに、ありがとうございました」と、悠紀子さんは山口にお礼を言った。

この人質事件で悠紀子さんは、この山口淑子と、最後まで人質として残った夫君・捷一さんたちを解放するに当たって活躍したアントニオ猪木の二人が、今でも頼もしい人間として強く印象に残っている。それに比して革新系議員は、本当に建前だけを言うだけでどうしようもなかったらしい。そして、外務省本省と現地日本大使館の無能無策ぶりである。

戦後、香港では李香蘭という名前で映画出演

さて、山口淑子は戦後、イギリス領の香港で何本か映画出演をしているが、その時は、李香蘭という名前で出ている。＜李香蘭と決別する＞と言っても、当時はまだまだ李香蘭の名前の方がアピールする力が大きかったからか、香港映画人の説得にやむを得ず従ったのかもしれない。

その後、テレビのニュースショー番組「3時のあなた」で日本のメディアに復帰し活躍、その知名度に目をつけた田中角栄に口説かれ参議院議員に立候補し当選した山口だったが、かつて満映時代から親交のあった映画評論家の岩崎旭は、自民党から出た山口について「共産党とは言わないが、せめて社会党あたりから出てほしかった」と言ったようである。これは、ある文章でも読み、戦中戦後の中国映画に詳しい石子順氏からも聞いた。

先日、親しい矢吹晋（横浜市立大学名誉教授）さんと飲む機会があったので山口淑子について聞いたら、やはり、戦中の活動に対する山口の反省は評価してもいいとのことだった。その折り、＜山口淑子を偲ぶ会＞があり、お別れの言葉を述べた藤原作弥さんの挨拶がとても良かった、と話された。

＜昭和史の申し子＞山口淑子

さっそく、藤原さんに電話をしたら、氏が書かれた李香蘭追悼の関連記事のコピーを送

ってください。その中にお別れの言葉が入っていた。それを紹介しよう。藤原さんはこのように述べられたのだ。

「あなたは、国立近代美術館フィルムセンターの試写室で、満映時代の『支那の夜』などの大陸3部作を観ながら、暗闇ですすり泣いていらっしゃいましたね。昭和6年、奉天郊外で起きた柳条湖事件、つまり満洲事変。昭和12年、北京郊外で発生した盧溝橋事件、つまり日中戦争。この二つの大事件が勃発した＜時＞と＜場所＞の近くに居合わせて多感な少女時代を送った——という偶然こそ、あなたが「昭和史の申し子」と言われるゆえんです」と挨拶された。

そして、山口淑子、大鷹淑子（かつて私・大類が山口淑子と名刺を交換したが、名刺には大鷹の下に小さく＜山口＞と記してあった）の日本名の他、李香蘭、潘淑華などの中国名、シャーリー・ヤマグチ、ヨシコ・ノグチなどの英語名、さらにはジャミーラ（可愛い人）というパレスチナ語の愛称で呼ばれた波乱に満ちた人生をどう呼べばいいか、と考えたという藤原さんは、職業、性別、国籍などあらゆる境界を超越した“偉大なヒューマン・ビーイング”という結論に達したという。追悼の言葉はこう結ばれている。

「特にあなたの戦後のジャーナリトおよび政治家としての生き方は、戦前の李香蘭時代の反省に立ち、アイデンティティーの苦悩の教訓を生かした一種の“キャンペーン”のように拝察しておりました。そのキャンペーンのスローガンは＜二度とあの戦争の悲劇を繰り返してはならない＞という文言でした。私も残された者は、あなたの遺言ともいえるべきそのイメージを、今後ともしっかりと受け継ぎ、子々孫々まで伝えていきたいと思います。どうぞ安らかに眠りください」。

その数日後、中目黒のキンケロシアター（つい最近亡くなった愛川欣也が作った小さい劇場）で愛川の遺作映画『満洲の紅い陽』を見に行ったら、『李香蘭と原節子』の著者で映画史家の四方田犬彦氏をお見かけしたので声をかけ、中目黒駅までの10分近い時間を歩きながら話をした。

その折り四方田氏は、山口淑子の戦前戦中のことは、藤原作弥さんが書かれた『李香蘭の半生』以上のものは出てこないだろう。いま山口淑子について言えば、戦後のパレスチナに関わった軌跡をもっと明らかにしたいと思うと話された。

藤原昨弥さんが言われたように、戦前戦中、そして戦後を含めた山口淑子の人生、その軌跡ほど、確かに「昭和史の申し子」といえるほど波乱に満ちたドラマティックなものだった。

彼女について書こうとすると実に話が尽きないのである。

（おおるい・よしひろ：本会事務局長）

ほうまさ 燎原の火は方正から

—現在と未来を切り開く方正日本人公墓—

大類 善啓

＜この原稿は、代表・加藤宣幸さんが責任編集するメールマガジン「オルタ」133号（2015年1月20日に配信されたものである。「オルタ」は2004年3月20日に創刊され、この4月20日で136号を迎え、＜一人ひとりが声をあげて平和を創る＞をモットーに毎月一度、約17000人に配信され、HPの訪問者数は2万人前後だという（2015年1月末現在）。今回の拙文は加藤さんより依頼され書いたもの。加藤さん了解の下に転載する。（大類）＞

はじめに

私が初めてハルピン市の郊外にある方正県を訪問したのは1993年の7月である。方正はハルピンから東におよそ180Km、バスで3時間ほどかかる中国東北部の田舎である。今でこそ高度経済成長の波に乗って方正県も豊かになり、4階建ての立派な市庁舎が建っているが私が初めて訪問した時は、木造の2階建ての庁舎であり、いわば村の役場といったおもむきだった。

当時は、前年に発足した『方正地区支援交流の会』が活動を開始したばかりの時だった。実はこの会が発足するまでにはまた、生々しい人間ドラマがあったのであるが、いまその詳細を語る余裕はない。ともかく、残留婦人や“残留孤児”が一番輩出した方正県に対して支援していこうと会は設立されたのである。

1980年代の後半から90年代に入ってから、残留婦人や残留孤児と呼ばれた人たちがどんどん日本に帰国していた。長年住み慣れた中国から帰国した残留婦人たちはしかし、母国である日本で必ずしも幸せに暮らしたわけではなかった。夫を中国に残した人、養父母と別れて帰ってきた人たちなども多く、新たな悲劇が生まれていたのである。

私たちの会は、日本に帰国することが即、幸せなことではない、必要なのは中国に留まる人たちを支援することではないか。そのために、残留婦人たちが一番多い方正県を中心に支援していこうと活動していた。

ちなみに方正は＜ほうまさ＞と呼ばれている。黒竜江省には宝清県という地があり、旧満州に在住していた日本人たちは、その宝清を＜ほうせい＞と呼び、方正を＜ほうまさ＞と呼んで両県を区別していたのである。残留した日本人たちがその地を＜ほうまさ＞と呼ぶように私たちもそれに倣い、方正を＜ほうまさ＞と呼ぶようにした。

初めて目の当りに日本人公墓を見る

私も参加した8人ほどの第一次方正県訪中団には、方正出身で日本に在住した4人の、いわば方正華僑もいた。その後続々と方正出身者が日本に在住するようになったが、この4人はいわば、その先駆けになった人たちだった。

初訪問の際、県政府の幹部たちと会議をもって話し合ったが、私が方正で一番印象に残ったのはなんといっても日本人公墓の存在である。県の中心から東に行ったところに砲台山と呼ばれた一角があり、そこに「方正地区日本人公墓」と「麻山地区日本人公墓」が仲良く並んで立っていた。

今でこそ、隣接するところには残留孤児だった遠藤勇さんが自力で建てた「中国養父母公墓」、またそのお隣の地には、黒竜江省を中国一の米作地に育てた藤原長作さんの記念碑が立てられているが、1993年当時は、この二つはまだ建立されていなかった。

その後さらに小さな記念館が建てられ、公墓を含む一帯を囲むようにして現在は<中日友好園林>と銘打たれているが、初めて私が訪れた時は、墓守が休む小屋があるだけだった。現在あるような<中日友好園林>という大きな看板もなく、中に入るには墓守を兼ねた守衛が鍵を開けて参拝するのである。

団の事務局長を務めた牧野八郎氏は、戦前二度にわたって国家権力に大弾圧された大本（教）の信徒であり、その時私たちは牧野氏の先達で神道形式で慰霊祭を行い参拝したのである。

二つの日本人公墓を参拝して私が改めて思ったのは、<侵略した日本人たちが眠るお墓を侵略された国が建てる>ということの不可思議さである。

1963年に建立された「方正地区日本人公墓」は、日中が国交を回復する9年ほど前、まだ日本への憎しみが強く残っていた時代に立てられたのである。

私は、中国の度量の深さを思った。これが逆の立場だったらどうだろうか。仮に中国が日本を侵略し、日本に残留して亡くなった中国人たちがいるとしよう、その人たちのお墓を日本政府が建てるだろうか、と思った。まず建てることはあるまい、と思ったのである。

その10年後、「方正地区支援交流の会」は大黒柱だった石井貫一さんを失った。享年94歳、かつて旧満州の地、日本の傀儡国家『満洲国』の副県長を務めたこともある石井さんは戦後、自民党の政務調査会調査役として移住を中心とした中南米政策に関わっていたが、常に頭の中にあっただのが中国残留者の存在だった。残留邦人の二、三世及び養父母に対する支援のために会を牽引した石井さんを亡くし、また一定程度の活動を終えた会は半ば、休止状態に入った。

いっそのこと、会を解散するかという意見も出てきた。当時、中心的に活動をした5人ほどが集まり協議をした結果、10年近く活動してきた会をこのまま解散するのは忍びない。残留婦人がほとんど日本に帰国したが、なんらかの形で会を存続させたらどうかという意見が大半を占め、取りあえず活動の担い手の中心を若手に移そうという意見で一致した。

若手ともいえない私だったが当時は、その中で一回り若い世代だったこともあり、こうなるなら逃げるわけにはいかない。新たに再編した会の事務局を引き受けるのはやぶさかではない。しかし経済的な支援活動ができる自信もなく器でもない。

私が中心になって会を担うなら、方正に建立されている<知られざる日本人公墓>の存在を多くの人たちに知ってもらおう、公墓建立の精神、その輝かしい国際主義的な精神を

多くの日本人に知ってもらおう、そのための活動なら大いにやりたいし、その意味はあるだろう、と思ったのである。仲間の先輩諸氏も私の考えに賛同してくれ、新たに「方正友好交流の会」が発足した。

実はその前に私たちは、『風雪に耐えた「中国の日本人公墓」ハルビン市方正県物語』（現在絶版）を上梓していた。私がある中国通の集まりでこの本のことを紹介する際、「日本人公墓が中国にあるのをご存じですか」と尋ねたところ、新聞社の中国特派員だった人が3人いたにも関わらず、その場にいた10人ほどの人たち全員がその存在を知らなかった。

逃避行の末に辿り着いた方正の地

さて、なぜ日本人公墓が方正県にあるのかを説明するためには、いわゆる「満蒙開拓団」について話さなければならないだろう。

1931年9月、日本が中国東北部（満洲と呼ばれていた）においた陸軍部隊、関東軍は瀋陽（当時は奉天と呼んでいた）北方の柳条湖付近で、「中国軍が満鉄線を爆破した」と称して一斉に中国への攻撃を開始した。世にいう＜満洲事変＞である。中国では＜918事変＞と呼ばれるこの戦いを契機に、日本の中国への侵略戦争は開始された。その翌年の32年3月には、日本は“満洲”に傀儡国家『満洲国』を建国した。

それ以降、“満洲”には国策として農業移民が続々と送りこまれたのである。日本国内の人減らし政策でもある貧農救済、その上、ソ連への防衛策として、中国北方のソ連国境沿いに“開拓民”が送り込まれたのである。“開拓”と称していたが、中国の農民たちが開墾した土地や耕作地を強制的に安い値段で買ったたき、追い払い、日本のものにしていった。そうしておよそ27万人を開拓民として中国に送りこんだ。それ故に、当初は武装移民として、関東軍の護衛の下に満蒙開拓団は中国に入って行った。

当時のマスメディアは、“満洲”を五族協和、王道楽土として称え、映画館でのニュースは＜行け、満洲へ＞と、国民を満洲へ満洲へと駆り立てて行ったのである。

昨年3月、長野県下伊那の阿智村にある満蒙開拓平和記念館を訪れたが、満洲へ行くことを煽った当時のアサヒグラフ（1938年、昭和13年7月27日発行、朝日新聞社刊）が展示されていた。表紙には、＜村を挙げて新大陸へ＞と刷られており、本文には、信州大日向村の国策分村大移住という記事が出ていて、改めてメディアの戦争責任を思った。

当時の日本政府は、1937年から20か年で100万戸、総計500万人を満洲に送り出す計画を持っていた。「満洲に行けば20町歩（約20ヘクタール）の地主になれる」と謳って開拓団を募っていたのだ。

開拓民が一番多かった長野県は、約3万3千人、前出の満蒙記念館が立てられた長野県下伊那郡は其中で最も多く、約8400人だった。

1945年の春から6月にかけて戦局が悪化する一方でも開拓民は中国に送り込まれた。敗戦の2か月ほど前には、東京・大田区の荏原からも開拓団が送り込まれていた。

1945年8月9日、ソ連はかねてから準備していた戦端を切り開いた。ソ満国境を越えて怒涛のごとく“満洲国”に侵攻してきたのである。このソ連参戦をすでに見越していた関

東軍は南方戦線に動員されており、開拓民たちは為すすべもなく逃げ惑った。

そして日本の敗戦である。日本人に面従腹背していた中国農民は、今こそ恨みを晴らそうと開拓民に襲いかかった。

北方にいた日本人の開拓民たちは必死に逃げた。後ろからソ連軍が、周囲からは中国の農民が襲う中、方正に行けば関東軍がいる、食糧基地もある。とにかく方正へ行こう。方正にたどり着けば、なんとか生き延びることができると必死の逃避行を繰り返したのである。

壮年の男たちはすべて兵役に取られ、開拓団に残っているのは、老人と婦人と子供たちである。ソ連軍に捕まれば女たちは辱めを受ける、捕虜になるのは屈辱であるという戦陣訓もあり、集団自決する開拓団もあった。1984年に建立された「麻山地区日本人公墓」は、ロシア国境に近い黒竜江省の麻山で集団自決した人々が葬られているのだ。

一方で、親切な中国人に情けをかけられ、食料を恵んでもらった人たちもいた。また中国人に匪賊やソ連軍から身を守られた人たちもいた。しかし、ソ連軍に見つかれば全員殺されると泣き叫ぶ子供を絞め殺し、歩けない老人を置き去りにして逃げた人たちも多くいたのである。

開拓民の中には3か月近い逃避行の末、方正にたどり着く者もいた。

そうして方正収容所に収容された人々は1945年の秋から翌年の春にかけて、発疹チブスと餓死でおよそ5千人近くが死亡した。

すでに八路軍（中国共産党の人民解放軍）は東北を支配しつつあった。零下40度にもなる酷寒の冬の方正では、死体は凍りついている。しかし春になれば死体は溶け始めて悪臭を放つ。八路軍の兵士たちは日本人の遺体にガソリンをかけ、三日三晩かけて焼却し、砲台山近くに埋めた。

生き延びるために日本の女たちは中国人の嫁になった。子供たちは売られたり、もらわれたりした。＜日本人は頭がいい＞、そういう信仰もあったようで、子供のいない中国人夫婦たちが日本人の男の子を欲しがった。

残留婦人、残留孤児がこのようにして生まれたのである。

白骨の山を見つけた残留婦人

その残留婦人の一人である松田ちゑさんは、いやいやながら中国人の嫁になった。

1963年の春、ちゑさんは自分たちの食糧を得るために砲台山の麓近くで、開墾できる土地を探していた。新中国は1949年に成立したが、1958年から60年にかけての、鉄鋼や穀物生産を急速に増進しようという＜大躍進政策＞は失敗し、人々はたいへんな食糧難に陥っていた。一説によると、餓死者が2千万人近く生まれたという。その失策を補うため中国政府は、農業公社の畑でない荒地を人々が耕作して自分たちで食糧を調達するように指示したのであった。

ちゑさんは夫とともに開墾できそうな荒地を探し、枯れ草を分けながら進んでいった。そして白骨の山を見つけたのである。ちゑさんはすぐにそれが、1945年から46年にかけて亡くなった日本人たちの白骨であることを知るのだった。

松田ちゑさんはこう書いている。

「私は、ああ国のために祖国をあとにした開拓の妻や子供がこんな無残な姿とはあまりにひどすぎる。日本政府では、このような犠牲者の遺骨を知っているのだろうか。私は残念で胸が押さえつけられるようでした。主人のそばへ戻って草を刈り始め、手は鎌を握っておりながら、心は枯れ草の中の遺骨のことばかり考えていました。

この遺骨をなんとかしてあげられないだろうか、と草を刈りながら胸がいっぱいになってきました」(『開拓残留妻の証言』、奥村正雄著『天を恨み地を呪いました―中国方正の日本人公墓を守った人たち―』より)

ちゑさんは県政府に出向き、なんとか自分たちの手で遺骨を埋葬したい旨を言い、許可してくれるように願い出た。

開拓民は日本政府の国策で生まれた被害者でもあるが一方、まぎれもなく中国側から見れば侵略者たちの一群である。しかし、当時の中国政府の指導者たちは毛沢東、朱徳、周恩来などの革命世代であり、狭隘なナショナリズムを超えた国際主義的な精神を持った人たちだった。その精神は末端の県政府レベルでも浸透していたと言っているだろう。

何故ならこの県政府の段階で、＜開拓民だと称するが侵略者の手先ではないか＞と、松田ちゑさんの願いを却下してもおかしくないのだ。

これは想像の域を出ないのだが、革命世代である鄧小平以後の時代だったら、県政府レベルでも対応が違ったのではないかと思う。

しかし当時の県政府は判断を黒竜江省人民政府に仰いだ。省政府も北京の中央政府にお伺いをし、外相・陳毅を経て周恩来総理の段階まで行った。最終的に周恩来は、「開拓民といえども日本軍国主義の犠牲者である」と言って、日本人公墓の建立を許可したのである。

1963年5月、方正県政府は松田ちゑに「あなたたちも日本軍国主義の犠牲者です。墓碑の建立は人民政府の手でやることに決まりました」と告げた。

しかし中国政府はことさらに、この公墓を建立した深い思想や、度量の大きい精神を宣伝めいて言うこともなく、また残留婦人たちの末裔の声も小さく、日本人公墓の存在を知る人たちは、開拓民関係者や日中友好運動に関わる一部の人たちが知るに過ぎなかった。

公墓の存在を知らせようと＜方正の会＞が発足

知られざる日本人公墓を多くの日本人に知ってもらおうと、＜方正友好交流の会＞は発足した。この会の名前を発案したのは、石井貫一さんの片腕的な存在だった木村直美さんである。その木村さんも昨2014年12月逝去された。

実は私は、この会の名前は気に入ってはいなかったが、他の人たちもいいネーミングが思いつかず、2005年6月の創立総会で集まった人たちの意見も聞いて考えよう、取りあえず仮の案として創立総会に臨んだのである。

当初、前出の仲間の奥村正雄氏からは、「総会に30人が集まれば大成功だよ」と言われた。そうか30人か。それなら集まるだろうと思いつつ不安だった。ところが創立総会はその倍近くが集まり、長年、残留婦人問題取材していた新聞記者たちも来てくれ、会は＜方正友好交流の会＞として報道された。マスメディアに会の名前が出た以上、もうこの名

前でいくしかないと現在まで、この名前で来ているのが実情である。

当日取材に来ていた読売新聞・徳毛貴文記者は 2005 年 7 月 7 日付夕刊に会を紹介し、＜「日本人も同じ犠牲者」中国側が建立＞という見出しで日本人公墓の存在を大きく紹介してくれた。その記事を見ていち早く電話をしてきたのは、これも昨年（2014 年）9 月に亡くなった山口淑子だった。戦前、李香蘭として一世を風靡し、戦後もテレビキャスターや政治の舞台で活躍した山口淑子は、「私も日本人公墓が中国に建立されているのを初めて知り、驚きました。私に何かできることはないでしょうか」と電話口で私に言うのだった。

その山口淑子は、1972 年の周恩来と田中角栄が署名した日中国交正常化宣言の時、涙を流した一人だった。

国交正常化の共同声明に調印した後、田中首相らを乗せた飛行機が北京を出発する時、テレビは生中継をした。山口淑子は書いている。

＜『3 時のあなた』を司会していて、思わず涙がこぼれました。いけない。生番組の放映中です！ 私は主婦の皆さんが並んでいる方を向いて涙をぬぐい、カメラを振り返って、また司会を続けながら、胸の中でつぶやきました。

——よかった！ 日本と中国の、あの長かった長かった戦争という悪夢から、これでやっと覚めることができる——（中略）

日中の両首脳が力強い握手をした瞬間、東京・八重洲口でテレビの前に立ち止まっていた黒山の人垣の中から「ウ、ウッ」と、男たちのうめきが聞こえたといひます。日本人全体が、感無量だった一瞬ではなかったでしょうか＞。（『戦争と平和と歌 李香蘭 心の道』

私たちは創立総会後の 9 月に『星火方正』と名付けた会報を創刊した。この冊子で日本人公墓を知った一人に映画作家の羽田澄子さんがいる。羽田さんは大連生まれ旅順育ちである。彼女はこの公墓の存在をきっかけに、2008 年『嗚呼 満蒙開拓団』という記録映画を創った。翌年の夏、2 か月間に亘って岩波ホールで上映されたが、そのプログラムに羽田さんはこう書いている。

「たまたま送られてきた『星火方正』という一冊の薄い冊子が私の気持ちを大きく動かすことになった。この冊子によって、私は初めて中国東北部、ハルピンに近い方正県に、亡くなった日本開拓村の難民のために中国人が建立してくれたお墓『方正地区日本人公墓』があることを知ったのである。私は驚いた。関東軍に侵略され、開拓団に土地を奪われ、日本人に恨みをもって当然な中国の人が＜何故、日本人のお墓をと思ったのである＞」（「なぜ映画『嗚呼 満蒙開拓団』を作ったか」）

さて、山口淑子がテレビ中継を見て涙を流してから 40 数年後の今、日中関係は最悪ともいふべき状況である。然るべき調査によると、双方とも相手国に対して好感を持ってないというのが 80%を超えているという。その主要な要因が領土問題から発生しているのは誰もが認めるところだろう。

領土問題を契機に、中国も日本もナショナリズムが勢いを増しているのだ。それも市民

レベルから起こったのではなく、政府レベルの対応がその大きな要因とも言えるだろう。どの時代のどの政府であろうと、時の為政者は自分たちが不人気だと思えばナショナリズムを煽り、愛国心を駆り立てるような政策を取る。庶民にとって領土問題は実に分かりやすいテーマなのである。紛争の種の多くが領土問題であることは、世界の歴史をざっと眺めて見ればわかることだろう。

現在の火種である＜尖閣諸島＞は、国交正常化が成立した 1972 年、双方は＜小異を残して大同につこう＞と、周恩来は棚上げを提案し田中角栄も了承した。1978 年、鄧小平は＜次の、次の世代に任せよう＞と言った。＜孫の世代になると賢い智慧も生まれるだろう＞と語り、双方の首脳は意見の一致を見たのである。

＜固有の領土＞なるものはどこにもない！

ところが作今、日中双方は＜我が国固有の領土＞なる言葉を持ち出している。私はこの＜固有の領土＞という言葉を開くたびに、実に不遜な言い方だと思ってしまう。誰に対してか？ 大いなる大地に対してである。尖閣諸島を＜共有の道しるべ＞としてきた近隣海域の漁民たちに対してである。

そもそも論議の前提になっている「日本」にしろ「中国」にしろ、このような「国民国家」なる概念はたかだか、100 年ほど前になって初めて出てきたものである。日本についていえば、それ以前は薩摩であり肥後であり長州という「藩」という概念に支配され、自分を＜日本人＞と捉えてはいなかった。自分は薩摩の人間であり長州人だと思っていて、そう公言していたのだ。

それ以前はどうだったか。はるか 2000 年前、「わが日本」なるものはなかった。例えば、「わが国への稲作技術の到来」というような歴史の教科書の記述などを讀んだり聞いたりするたびに、当時の人々にとって、そこが「日本」であり、彼の地は「中国」だったろうか。そんな「国」はありもしなかったのである。

歴史家の網野善彦によれば、「日本」という名前が登場するのは、8 世紀初頭に勢力を振るっていた一族が本州の西南部や九州北部をめぐる領土の支配を確立した時のことである。その最高権力者が「天の王」を意味する天皇という称号を与えられた。要するに、「日本」とはある特定の一族によって支配された政治的な単位だったのだ。

そういう観点をしっかりと持っていれば、「国民国家」概念が存在する以前、どこの海であろうと、異なる言語を話す近隣の漁民たちは時に争うことはあっても、おのずと共存しながらお互いに漁を釣って生活の糧にしていたと想像できるはずである。長期的な視点に立てば、いわゆる領土問題などもおのずと「共同開発して共に利益を享受しよう」という考えに到達できるだろうし、それこそが平和的な解決方法だと認識できるだろう。

国際主義を超えて「世界市民」としての思想へ

紆余曲折を経ながら今日言うところの「国民国家」概念が生まれ、領土問題も発生してきた。

周恩来がソビエトの友人と話をした時、アメリカ帝国主義と発言したが、通訳は「アメ

リカ人」と誤訳してしまった。すると周恩来はすぐさま「アメリカ帝国主義とアメリカ人は違う」と発言して通訳の誤りを訂正した。周恩来はどのような政府とも、その国の国民との違いを区別した。

しかし江沢民が主席として登場以降、「国際主義」なる言葉はついぞ中国から消えてしまった。横浜国立大学名誉教授の村田忠禧氏が過去数十年に亘って「人民日報」の社説に出てくる単語の頻出度を調査したところ、「国際主義」という言葉は年毎に減り、それに代わって「愛国主義」なる言葉が頻繁に表れるようになったという。ここ 10 年は、国際主義という言葉がほとんど消えてしまったと慨嘆している。

国際主義はもともとマルクス主義の「労働者に祖国はない」というプロレタリア国際主義から来ている。思えば国際主義もいわば「国民国家」が前提になっている。国民国家はすぐさま国家主権なる考えに足をすくわれ、領土問題などが発生するといともたやすく狭隘なナショナリズムの勃興に道を開くのである。

私は今こそ、国民国家の限界性を認識すべきではないかと思う。＜ある国の国民である＞という考えよりも、国境や国家を超えて自立した個人、いわば世界市民という考えを持つことの重要性を認識すべきであると思う。

理想的過ぎると言われるかもしれない。しかし理想を放棄したら、ますます悪しき現実には足を引っ張られてしまうだろう。

近年の排外的なナショナリズムの動きを見るにつけ、民族間の争いを防ぎ、平和な世界を作ろうとして世界共通語エスペラントを創ったルドヴィーコ・ラザーロ・ザメンホフが唱えた **Homaranismo**（ホマランイスモ、人類人主義）こそ、これからの世界は求められているのではないか、と思うようになった。

エスペラントで「ホマーロ」は人類、「アーノ」は一員を意味し、それに「イスモ」がつき「人類人主義」、つまり国家や民族を超え、あるいは捨てて、我々は人類の一員であるという思想である。いわば我らは世界市民の一員だと規定し行動するのだ。

習近平主席は、昨年 9 月 3 日の抗日戦争勝利記念日に「日本が侵略戦争を起し、中国人民に災難をもたらしたのは日本軍国主義がやったことであり、中国政府と人民は未だかつてあの戦争の責任を日本人民に帰したことはない」と語った。日本政府と日本人民を区別したのである。ここには周恩来らの国際主義的な精神が確実に生き続けていると考えていいだろう。

しかし何度も言うようだが、国家主権を前提とするような国際主義は、狭隘なナショナリズムを超えることはなかなか難しいと思う。

今私たちは、いや私は、居住する国で国際主義者であろうとするより、ザメンホフの人類人主義、いわば人は地球の一員であるという考え方、生き方を志向することの方が重要なことではないかと思っている。

歴史は、国際主義者がナショナリストたちに敗北し続けてきたことを、思い出さずにはおれないからである。

試写会のご案内

記録映画『10日間だけの祖国』

奥村正雄

4年がかりの映像（ドキュメント）がようやく出来上がった。映像の8割がたはすでに撮り終え、昨年の方正友好交流の会の総会では、未整理の状態で中間報告をさせていただいた。その時点で、どうしてもこの映画に欠かせない映像が一部、撮り残されていた。それはこの映画の主人公・徐士蘭さん（推定69, 70歳）が生まれて間もない1945年8月、方正県の郊外である開発鎮（村）にある小学校の校庭で、実母の手から一人の青年（張文学さん、故人）の手に托された、その現場の映像である。この映像がこれまで撮れなかったのには理由があった。古い校舎を全面的に建て替える工事が続いていて、撮影のために中に入れてもらえなかったためだ。この最後に残った映画のシーンを撮るために私たちがハルピン、方正へ行ったのは昨年1月だった。「たとえ鉄棒でぶん殴られても動くな（外へは出るな）」という古い諺があるほど厳寒の時期だった。私と吉川カメラマンは、厚着の中に、さらにホッカイロを何個か腰回りや足元などにしのばせた。

■実母と別れた校庭で

厚労省が彼女を残留孤児と認定する可能性が、限りなくゼロに近づいている。それはなぜなのか。それは孤児であることを証明だてる具体的な証拠がない、という理由だ。この映画の主人公・徐士蘭さんが、実の母親と別れたのは、日本の敗戦が決まった直後、1945年の盛夏8月だった。今から70年前の8月、この校庭で徐士蘭さんの実母の手から、まだ生まれて間もない徐士蘭さんを託された張文学さんは、戸惑いながら、自分がまだ、独り者の青年だったため、この乳児を近所に住む女性（徐士蘭さんの養母）に渡した。

近所の人たちは、みんなこの事実を知っていたから、徐士蘭さんが日本人であることを知らない者はいなかった。しかし厚労省が彼女が日本人の孤児であるかどうかを判定するには具体的な物的証拠が必要だった。徐士蘭さんの実母がまだ幼いわが子を張文学さんに渡した時は、あわただしい時間の中で、自分が着ていた和服の裾を千切り、わが子の名を書いて張文学さんに渡した。しかしこの唯一の物的証拠は、あの狂乱の文化大革命の時に、

後難を怖れた養父が焼却してしまっていた。残る証拠となるものは、幼い徐士蘭さんをこの手で実母から手渡された、当時、まだ未婚の青年だった張文学さんの具体的な証言しかなかった。

■ 異常な証言拒否

この唯一の証言を、張文学さんは、なぜか死ぬまで承知してくれなかった。

「村では、みんな徐士蘭は日本人の子だと聞いていたが、噂だけでは孤児である証拠にはならない。残るは、赤ん坊だった徐士蘭さんを、この手で預かって養母に託した張文学さんの証言だけだ」

村の人たちは、みんなそう思ったし、

「張文学さんが名乗り出てくれて、その時の状況やら、赤ん坊だった徐士蘭さんを養母に渡した時の経緯を詳しく証言してくれれば、本人でなければ言えない状況だって、厚労省の係官に詳しく説明できる。それができるのは張文学さんしかいないんだから」

と噂し合った。だが張文学さんは厚労省の聞き取りに頑として応じなかった。

その理由は不可解のままである。ただわかっていることは、死ぬまで彼は「ナニか」を怖れ、証言を拒み続けた。その理由を、みんなは噂し合った。さまざまな推理が行なわれた。あるいは戦争中に彼が体験したナニかが、明らかになることを終生、怖れ続けていたのではないか…たとえばあの「731記念館」で展示されているような、人間の行為とは信じがたいような、恐怖につながるトラウマが彼の中にあった、とでもいうような…。そうでもなければ、生い立ちから幼時を通して徐士蘭さんが体験した過酷な被虐体験を近所の住人としても、この目で見ていた彼が、彼女が祖国日本に帰るための唯一の証言を拒み続けた理由が不可解である。ちょうど、あの話題の中国映画『芙蓉鎮』で、文化大革命中に味わった恐怖の体験から正気を失い、もう文革は終わっているのに「…運動だ！」と叫んで歩く男のように…。

■ 養父が鎌を振り回し…

この養母は間もなく亡くなり、替わって徐士蘭さんを育てた養父が冷酷非情の男だった。自分の実子（徐士蘭さんの義妹）は小学校に通わせながら、徐士蘭さんには夜学校にさえ

行かせず、零下30度近い厳冬でも、素足に藁草履で働かせていた話や、徐士蘭さんが13歳の時に高粱70斤と2歳の子牛1頭と引き換えに40歳台の身体不自由な男と無理やり結婚させようとした。これを嫌がった徐士蘭さんを養父は「殺してやる」と叫んで鎌を振り回して追いかけた、村の役人と近所の人が間に入って騒ぎはようやく収まった話は、本誌11号でもお伝えした通りである。

幸い、16歳の時に巡り合った叢志文さんと、茶わんと箸だけの所帯道具で結婚生活を始めた徐士蘭さんは、やっと苦界から逃れ、貧しくとも人並みの生活に入ることができたのだった。こうした、さまざまな意味で徐士蘭さんと彼女の子供たちの人生にとって、忘れようとしても忘れられない人生の一時期を過ごした、それがこの開発鎮だった。

■ 外事弁公室へ

ここでの撮影を終わった後、私たちは真冬の方正→ハルビン間185キロの高速道をハルビンへ向かった。零下25度の高速道を時速110キロで走る私たちの車（徐士蘭さんの孫娘・孫洪波さんの夫が運転）を、はるかに超えるスピードで追い越してゆくトラックや大型バス。初めに感じた私と吉川カメラマンの恐怖心もしだいに薄れ始めた頃、車はハルピン市内に入り、スピードを落として行った。

車はハルピン市南岡区の黒竜江省外事弁公室の前に横付けされた。徐士蘭さん母娘と私たち二人は、旧知の外事弁公室副主任の徐広明さんに会った。徐士蘭さんが日本の入国ビザを取得するために、まずこの役所に何度も通い、わけのわからない理由で毎回、往復370キロの高速道路を無駄に通い続けなければならなかった役所である。この無駄足を一気に省いてくれたのが、この副主任の徐広明さんだった。徐士蘭さんの手続きが進まないのに焦燥感を募らせていた私たちが、黒竜江省外事弁公室のトップだった旧知の王英春さんに送った手紙が、机の上に積まれたままだったことは後でわかったことだが、この事実を知らないまま業を煮やした私たちが、何とかならないだろうかと泣きついたのが、この徐広明さんだった。すると、それまで理由もわからぬまま先に進まなかった手続きが、嘘のように動き始めた。そしてそれから間もなく、孫洪波さんから、

「書類が日本の領事館に回りました！」

という嬉しいメールが届いたのだった。

■ 忘れられない二つの表情

「書類が領事館に回れば10日間でビザが出る」

そんな“裏情報”を得ていた私たちは、すぐ、ルンルン気分で、それからの予定表を作った。10日間のホテルの予約、厚労省訪問、東京、千葉での歓迎会、桜の開花時期にあわせて富士山を目の前に見る西伊豆旅行…など。

ところが意外なことに、このあと瀋陽の総領事館からの連絡がぷつぷつと切れたまま、いたずらに時間だけが過ぎて行った。ホテルや歓迎会場を一時キャンセル、不安のまま時間が流れて行った。不安と焦燥感に包まれていた時、孫さんからメールが入った。

「ビザが出ました！」

その直後である、あの東北大震災が発生したのは。孫さんから追いかけてメールが入った。

「中国へ逃げてきませんか！」

祖国に帰国を拒まれた徐士蘭が私たちに中国に避難しないかと勧告してくれている…私たちは胸が熱くなった。後で知ったことだが、この時、原発事故による放射能汚染が日本列島を覆う恐れがあることから各国は日本在住の自国民を本国に引き上げさせたが、日本政府だけは大恐慌に陥ることを恐れ、国民にこの恐れがあることを秘したのだった。

それにしても原発事故を伴った東北大震災の先行きがどうなるのか、予想が難しい状況の中で、有効期間3か月のビザにどう対応したらいいのか…！ 私たちは迷いに迷った末、有効期間の最後の10日間の来日という決定に賭けた。その時になって日本が予想を超えるほどの大混乱に陥っていた時は、迷わずに徐士蘭さんに「残念ながら…」と伝えるほかない、がこの時の結論だった。

■ 底知れぬ孤独

東北大震災は巨大な災害をもたらしたとはいえ、幸い私たちは日本政府が日本人と認めない徐士蘭さんを、10日間だけ祖国に招くことができた。その喜びと祖国を離れる時のさびしそうな表情を私たちは忘れることができない。この二つの表情に隠された、「祖国を喪った者の底知れぬ孤独」を、この映画でじっくり見ていただきたいと思う。

秦野市で『嗚呼 満蒙開拓団』上映さる

2009 年から翌年にかけて映画作家、羽田澄子さん演出の映画『嗚呼 満蒙開拓団』が日本各地で上映され、多くの人たちが満蒙開拓団の実態などを改めて知ることになった。

映画の冒頭、ナレーターでもある羽田さんが『星火方正』の創刊号と 2 号を紹介し、「この不思議な冊子で、日本人公墓の存在を知りました」という言葉を聞いて、実にうれしい気持ちをしたものである。

それから 6 年も経って、いま改めてこの映画を上映するという話を聞いて、感慨を新たにした。まだまだ、「満蒙開拓団のことを忘れてはいけないのだ」という方々がちゃんといらっしゃるのだと思い、とても新鮮な気持ちになった。

そして上映前に、30 分ほど解説のようなものを話してくれと主催者の方から言われ、方正友好交流の会の大類善啓が秦野市に出かけた。

大類は、満蒙開拓団の悲劇は、敗戦前後“満洲”の大都市、ハルピン、長春、瀋陽、大連などで生きた日本人とは様相が違っていることを明らかにして、その悲劇性を浮き彫りした。

映画を終えてまた、30 分ほど質疑応答の時間があつた。上映中の途中で席を立つ人を見かけたが、後で主宰者の一人、高橋紀代子さんに聞けば、あの悲劇を「これ以上、見てはいられなかった」という人たちだったという。(K)



左は会場風景、右は講演する大類（写真提供：はだの・平和都市宣言につどう会）

～平和はたゆまぬ努力によってのみ築かれ保たれる～

第35回平和を考えるフォーラム 映画上映会

1930年代、27万人もの日本人が、開拓団として中国東北部（旧満州）に移民していきました。それは、中国の人々の土地を奪っての開拓でした。

その内8万人以上の人々が、敗戦の混乱の中で寒さや病気で亡くなり、あるいは集団自決で命を失ってしまいました。その人々のために、中国政府が作ってくれたお墓があります。

過去を知らなければ、
未来を誤ります。

なぜ、この悲劇は起きたのか。

あなたは今、この悲劇を知っていますか。

中国で何があった?!

嗚呼 満蒙開拓団

羽田澄子演出作品

2008年キネマ旬報文化映画ベストテン第1位
2008年日本映画ヘンクラブ文化映画ベスト1
2008年東京国際女性映画祭オーフニク作品

妹は最後に
「お芋食べたーい、お芋食べたーい」
と言っている間に
連れていかれた

満州に行くときは、
皆「国のため」と行つたの。
あんな道件を見ると
残念で

開拓団の人たちが
トラクタの窓に手をかけて
「乗せてくれ」って、
それを振り払って
行つちやうだから

大八浪郷
DAWA NAGAKU

今でも誰か官僚に聞きたい。
何で私たちが
満州へ送り出したのかって



◆日時 3月7日（土） 開場午後1時 開演午後1時半

◆場所 秦野市文化会館 小ホール

◇定員 480人 ◇入場料 無料（当日先着順）

【※保育サービスあります。事前にお申し込みください。】

- 13:35～ 解説「満蒙開拓団
ってなあに？」（方正友好交流
の会事務局長・大類善啓さん）
- 14:05～ 映画上映
- 16:05～ 質疑応答
- 16:30 閉会

《旅のご案内》

じっくり上海歴史散歩 6日間

上海はかつて魔都と言われるだけあり、なかなか魅力的な町です。横光利一が『上海』という小説に書いたように「さまよえる日本人」がいた街であり、戦後も堀田善衛が国民党に留用された街であり、またリヒアルト・ゾルゲやアグネス・スメドレー、尾崎秀美が生きた街であります。また一方、国民党政権下で上海映画人たちが素晴らしい映画を創り、また中国共産党が産声を上げた街でもあります。そんな旧英国租界やフランス租界跡をゆっくりと歩きます。

内山書店を中心に広がった魯迅と内山完造ら日本人との交流、また腐敗と旧世界の泥沼から新たな世界を切り開こうとした息吹きを、この旅で実感していただければと思います。ぜひご参加をお待ちしています。

上海歴史散歩の会代表 片山泰郎先生が租界時代の上海を案内します

日程

- 8月19日（水） 成田・関西・中部・福岡などから空路、上海へ（上海泊）
8月20日（木） 上海 戦前の日本人居住区を中心に散策（上海泊）
8月21日（金） 上海 旧英国租界のビル群を中心に散策（上海泊）
8月22日（土） 上海 古い上海の街並みが残る南市、豫園など（上海泊）
8月23日（日） 上海 終日：自由行動
オプション 蘇州1日見学（上海泊）
8月24日（月） 上海 中国慰安婦博物館見学後、空路帰国の途へ

旅行代金 ¥169,000（成田発）

募集人員 30名（最少催行人員）20名 添乗員付き 成田以外の空港についてはお問い合わせください。

申込み先 株式会社 富士国際旅行社 山口 宏晃

電話: 03-3357-3377 FAX: 03-3357-3317

E-mail: yamaguchi@fits-tyo.com

**主催 方正友好交流の会（連絡は大類善啓まで 03-3295-0411 または
090-2768-3338 E-mail: ohruai@jcst.or.jp**

後援 （一社）日中科学技術文化センター



製作／(株)現代ぷろだくしょん (2014年／日本／102分)
監督／山田火砂子 プロデューサー／国枝秀美 原作・脚本／和田登
『望郷の鐘』(しのき書房) 脚本／来咲一洋・山田火砂子・中村敦夫
出演／内藤剛志 渡辺梓 山口馬木也 市川笑也 常盤貴子ほか

【上映情報】

長野 センゲキシネマズ 公開中
静岡 シネマ・イーラ 5/16～2週間上映
富山 氷見キネマ 4/11～4/24
兵庫 元町映画館 3/21～4/3
長崎 長崎セントラル劇場 5/2～1週間
大分 別府ブルーバード劇場 6/20～7/3

【上映会情報】

▽北海道 室蘭市民会館 5/17(2回上映)
▽東京 なかのZERO 4/14・25・5/16
江東区総合区民センター 5/1 東京江戸博
物館ホール 4/27 ムーブ町屋 5/23 江戸
川区総合文化センター 4/30 賀川豊彦記念
松沢資料館 4/12・26 大泉学園ゆめりあ
ホール 4/18・5/9▽埼玉 川越市民会館や
まびき会館ホール 4/15▽千葉 行徳文化
ホール 5/16 東金文化会館 7/4▽神奈川
相模原南市民ホール 5/15 杜のホールは
しもと 5/29(いずれも2回上映)▽長野 東
御市文化会館 4/18▽愛知 アイプラザ半
田 5/23 新城文化会館 5/31(いずれも2回
上映)▽京都 京都デルサホール 7/18▽島
根 出雲文化伝承館 5/16(2回上映)▽高知
高知県立美術館 5/28

「国策」に翻弄された人々を救う

映画『山本慈昭 望郷の鐘—満蒙開拓団の落日—』を見て

方正友好交流の会・事務局長 大類善啓

悲

惨な「文化大革命」
が終りを告げ、中国
が新たな開放経済体
制に入った1980年代の初
め、苦難の人生を中国の東北
部で生きた婦人たちが、テレ
ビの画面に現れた。彼女た
ちは、平和な空気にどっぷり
とつかった日本人たちに、
「あなたたちの日本は私たち
を忘れていたのですか」と、と
鋭い刃を突きつけているかの
ように見えた。彼女たちの存
在こそ、中国残留日本婦人
であり、かつての残留孤児の現
在の姿だった。日本にいる肉
親を捜す「集団訪日調査」のた
めに日本を訪れたのである。
深い皺を刻んだ顔は、日本
で育った同年齢の婦人よりも
はるかに老いた姿をしてい
た。1945年の夏、旧満洲
ではソ連参戦によって、「開
拓民」たちはソ連軍から逃げ
惑い、日本の敗戦後は報復を
企てる中国人からも追われ、
方正などの收容所に行き着い
た。

生きるために泣く泣く中国
人の嫁になった女たち。足手
まといの子供や孤児たちは、
子どものいない中国人夫婦に
もらわれて生き延びることが
できたが、その後の人生も過
酷だった。

親切な中国人夫婦にやさし
く育てられ、大学まで通つこ
とができた孤児がいる一方、
単なる労働力のような存在と
してしか扱われず、小学校に
も通わせてもらえなかった孤
児たちも少なくない。

「文化大革命」の時代は、
スパイとして牢獄に入れられ
た残留婦人もいれば、日本人
の出自を隠すために日本人と
わかるようなものは一切捨て
られ、その結果、「残留日本
孤児」として自分を証明する
ものはなく、今なお祖国に帰
れない人もいる。

◇

『望郷の鐘』は、そんな残
留婦人や孤児たちを故郷の日
本に帰すために、全身全霊を
捧げて一生を終えた山本慈昭
を真正面から描いた映画作品
である。

山本は長野県下伊那郡のお
寺の息子として生まれ育ち、
当時は国民学校の教員を兼ね
ていた。1945年、「阿智
郷開拓団」で渡る子どもたち

の教師役として妻子とともに
「開拓民」として旧満洲に入
った。日本が敗北する3カ月
前である。

同年8月9日、ソ連軍は怒
海のごとく旧満洲北部の国境
を越えて侵攻した。女たちは
乱暴を働くソ連兵士から身を
守るため坊主になり、また中
国人の襲撃からも逃れるため
に逃避行を続けた。そうした
姿が生々しく描かれており、
山本演じる内藤剛志の演技が
光る。

山本は妻子と引き離され、
シベリアに抑留され、2年後
に帰国できた。しかし、妻は
死亡し子どもたちは行方不明
だった。そうして、かつての
悲惨な思い出も遠くなった
時、「自分の親を探してくだ
さい」という手紙が中国に残
された孤児から山本に届く。

映画は、そこから一人で残
留婦人や孤児を捜し出し、日
本に帰国させようとする山本
の活動を描く。日本の政府機
関がほとんどその存在を無視
する中、孤軍奮闘する山本の
姿からは、(国家は人々を何
度も棄てる)という、庶民に
冷たい日本国家の姿が見えて
くる。

戦争を知らない若い人た
ちにぜひ見てほしい映画だ。

文化の発祥地は国境を越える！

文化のジャンルでも過度に自国の文化の優越性を言うと危険な兆候になりかねない。そういう意味でも映画『白夜のタンゴ』は面白かった。映画に触発されて書いた原稿が東京新聞文化部でそれなりに評価してくれたようで掲載してくれた。文化の起源はタンゴに限らず、国単位ではかれるものでないと思う。それぞれ国境を越えて影響し合っているものだ。そんなことと思ってご笑覧いただければ嬉しい。(大類善啓)

映画「白夜のタンゴ」に思う

大類 善啓



タンゴを踊る人たち＝ブエノスアイレスで（筆者提供）

起源はさまざま望郷の魂

昨年十一月に公開された映画『白夜のタンゴ』はそんなタンゴの起源に迫っている。映画の冒頭、フィンランドの世界的な映画監督アキ・カウリスマキは、こう言うのだ。「タンゴの起源には誤解がある。ウルグアイもアルゼンチンも主張するが、本当はフィンランド東部が起源だ。今はロシア領で、牧羊犬や牛がいる森だ。人々は家畜を守るために歌い始めた。寂しさも

のに我々とはとても謙虚だ。歴史に触れないということに慣れているんだ……」『白夜のタンゴ』を見てとても爽快な気分になった。タンゴの起源がフィンランドであらうとアルゼンチンであらうと、ウルグアイであらうと構わない。タンゴを聴き、タンゴを踊り、そして豊かな情感を味わえばそれが最高なのである。タンゴを聴いてし

あつたろう、湖畔のダンスホールで踊り始めたんだ……」カウリスマキはこう語り、それが一八五〇年代で八〇年代には西部に伝わった。船乗りがそれをブエノスアイレスに伝え、現地の人が聴いて突

然人気になったという。「船はウルグアイに行つてその後アルゼンチンに行ったんだ。アルゼンチン人はその順番を忘れ、さらに我々を完全に忘れた。我が国が起源なことによって、タンゴを踊る

ことによって虚しさを慰められる。疎ましい日常性を超えたのである。いや超えようと考へなくとも、日ごろの弛緩した感性や鬱屈した感情を洗い流してくれるのだ。タンゴはフィンランドのものでなく、ウルグアイのものでなく、ましてやアルゼンチンの独占物でもない。そもそもタンゴは、故郷を喪失した人々の思い、故郷への思いを歌っている。失われた過去を追憶しているものである。恋に破れて涙を流し、職を失って嘆き、母国を離れて故郷を思う人々が共有できるものなのだ。情感あふれるタンゴを聴き、心豊かになる。畢竟、タンゴは人間のものなのである。祖国も民族もない。故郷を失い、彷徨う人々の、個人の魂のものなのである。

◇ おおるい・よしひろ ジャーナリスト。1944年、大阪市生まれ。日本タンゴ・アカデミー会員。著書に『ある華僑の戦後日中関係史』。

一九六五年、作家高橋和巳が『憂鬱なる党派』を発表した。まさに「憂鬱な」六〇年安保闘争後の挫折感漂う学生時代、神田神保町の古本街を歩き、ほっと一息つくのがタンゴを専門に聴かせる喫茶店だった。それから二十数年後、同じ場所でタンゴのレコードコンサートに身を置いていた頃、主宰者が「どうして日本人は黙ってタンゴをただ聴くのか、踊りもせず歌いもせず」というアルゼンチン人の言葉を紹介した。まったくその通りだと思い、タンゴダンスのレッスンに通い出した。そして派手な社交ダンスとは一味もふた味も違う、動きを抑えたタンゴのサロンダンスに魅せられた。

不世出のタンゴ歌手、カルロス・ガルデルの出生を含め、タンゴの発祥地を巡ってアルゼンチンと隣国ウルグアイは昔から争っていたが二〇〇九年、両国は互いに手を結んでユネスコ世界無形文化遺産に申請し認可された。しかし、その両国に異議を唱える国が出てきた。フィンランドである。

方正日本人公墓が私たちに問いかけるもの

——「方正友好交流の会」へのお誘い——

1945年の夏、ソ連参戦と続く日本の敗戦は、旧満洲の開拓団の人々を奈落の底に突き落としました。人々は難民、流浪の民と化し、真冬の酷寒にさらされ、飢えと疫病によって多くの人々が方正の地で息絶えました。それから数年後、累々たる白骨の山を見た残留婦人がなんとかして埋葬したいという思いは、県政府から省政府を経て中央へ、そして周恩来総理のもとまでいき、中国政府によって「方正地区日本人公墓」が建立されました。中国ではまだ日本の侵略に対する恨みが衰えていない1963年、中国政府は、中国人民同様わが同胞の死も、日本軍国主義の犠牲者だとして手厚く方正に葬ってくれたのです。日本人開拓民たちのおよそ4500人が祀られているこの公墓は、中国広しといえどもこの方正にあるものだけです。（黒龍江省麻山地区でソ連軍の攻撃に遭い、400数十名が集団自決した麻山事件の被害者たちの公墓も1984年に建立され、この方正の地にあります）

この公墓の存在は、私たちの活動もあり徐々にではありますが、人々に知られるようになりました。民族の憎悪を乗り越えて建立され、中国の人々によって管理維持されている公墓の存在を、更に多くの人々に知ってもらおう。「愛国主義」ではなく、民衆レベルでの国際的な友愛精神を広めていこうと設立したのが「方正友好交流の会」です。当会の前身は1993年に設立され、2005年6月に再発足し、日中友好の原点の地ともいうべき「方正」に光を当てたいと活動しております。

個人会員 一口 1,000円 団体・法人会員 一口 10,000円

（口数は最低一口、上限はありません）

方正友好交流の会

101-0052 東京都千代田区神田小川町3-6（社）日中科学技術文化センター内

電話 03-3295-0411 FAX 03-3295-0400 E-mail: ohruai@jcst.or.jp

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス : <http://www.houmasa.com/>

《報告》

ありがとうございました

前号の会報 19 号入稿後、2014 年 12 月 2 日以降にカンパをお寄せいただいた方、また新たに会員になられた方々のお名前を以下に記して感謝の意をお伝えします。ありがとうございました。(敬称略、受付けた順に記載しました。2015 年 4 月 30 日現在)

磯部荀子 猿川清吉 宮下春男 野田尚道 村松賢英 坂田和子 肥後茂樹 鶴澤弘
矢吹晋 滝永登 山川梅子 手塚登士雄 中嶋定和 下山田誠子 大島満吉 塚田恵子
山吉昭三 由井格 猪股祐介 森博勇 栗原貞子 石橋辰巳 阿久津国秀 吉川孝人
小出公司 望月迪洋 田中丸邦彦 NPO 法人やまなみ 湊谷節子 渡辺一枝 辻康子
山本勇造 山下美子 佐藤良夫 天竺桂尚穂 武吉次朗 岩増弘三 白西紳一郎 小玉正憲
山田寿子 石原健一 岡百合子 佐藤すみ江 伊藤貴子 吉川健 高木凉子 篠田欽次
鈴木幸子 貞平浩 佐藤千栄子 渡辺保雄 遠藤勇 篠原国雄 滝口洋子 榎戸吉貞
木戸富美江 杉田春恵 島辰夫 黒岩満喜 馬場永子 田崎雄児 望月信孝 石田和久
森田恭子 篠原淳子 田澤仁 藤村光子 窪田かづよ 生田和美 高田京子 慈氏周豊
小畑正子 奥田俊夫 小関光二 長谷部照夫 岡庭成巳 伊原忠・泰子 唐沢修 北澤吉三
大里浩秋 竹中一雄 伊東行子 石原政子 金子彰 小松征夫 近寅彦 小林淨子
遠藤滋 古賀勇一 風間成孔 久保和男 江藤昌美 矢田博子 藤勝徳 新谷陽子
大森猛 小柳保征・公代 金倉美佐恵 櫻庭ゆみ子 宮本アジア研究所 山内良子
照山真木子 金成敬子 瀧亀久男 高橋かよ子 新田百合子 林郁 高橋健男 野津久夫・
喜美子 寺本康俊 深山信雄 山田敬三 永宮彌生 名取敬和 金丸千尋 栗林稔
今村隆一 堀江はつ 菅原三太郎 松島赫子 樗沢仁 石田武夫 鈴木敏夫 南村豊實
小柴玲子 前川よしえ 石橋実 田井光枝 鳥島せい子 今井和江 田平正子 柴崎葦津子
平良長政 南雲英雄 中井詔太郎 石金楷 柳瀬恒範

.....

＜編集後記＞ 当会の事務局がある日中科学技術文化センターの会報「きずな」の編集作業と雑事も重なり忙しかったが、なんとか 20 号を発刊できた。今号も森一彦氏の他に、奥村正雄氏から編集業務で助力を受けた。

今回は原稿が少ないかと心配していたが、それなりの厚みになった本号である。これらもぜひ、この会報にふさわしいと思われる原稿をどんどんお寄せいただきたい。

現政権は、日米同盟の強化というお題目の下、日本国憲法の問題などどこ吹く風という感じで、どんどん戦時体制のように突き進んでいる。これからの行く末を思うと、過酷な先の戦争体験をどう伝えていくかが重要な我々の任務だと思う。巻頭に掲載した岩崎スミさんの＜野ざらしの骨＞は、そういう意味で熟読してほしいものだ。(大類)

《表紙写真撮影：吉川雄作》

『星火方正～燎原の火は方正から～』(第 20 号) 2015 年 5 月 15 日発行

発行：方正友好交流の会 編集人：大類善啓 Email：ohrui@jcst.or.jp

〒101-0052 東京都千代田区神田小川町 3-6 日本分譲住宅会館 4 F

(社)日中科学技術文化センター内 電話：03-3295-0411 FAX：03-3295-0400

郵便振替口座番号 00130-5-426643 加入者名 方正友好交流の会

HP アドレス：<http://www.houmasa.com/>

